

病気になるけど不老不死

篠崎零花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだら体を残して生き返ったり、そのまま生き返れたりする不老不死

見た目も老いないから変わらない。だから不老不死。

なのに病気にかかる。風邪とかおたふく風邪とか。

インフルエンザにもなるよ、嫌だね！

そんな普通の人間みたいな不老不死が勘違いされたり、したり、つつこんだり、色々とするかもしれない日常。

※文章力が低めかもしれませんが、そのところ、申し訳ないです。

※本編12話、if9話で完結しております。ただ番外編を投稿する可能性が大ですので、連載中のままにしております

目次

0話	今までの登場人物	1
本編 病気にもなる不老不死(笑)の日常など		
1話	不老不死は友達と	9
2話	不老不死は友人達と共に遊園地で	16
3話	不老不死の友人の誕生日	23
4話	不老不死は不老不死だった	33
5話	不老不死と仲の良い人達	38
6話	橘悠希は人の日記を見て	42
7話	不老不死の日常	48
8話	不老不死と四ノ宮椿。あと少しの日常	52
9話	不老不死の両親への挨拶+? α	56
10話	秋めく日々と不老不死	61
11話	不老不死は連れていかれる	66
12話	数十年後、病気などにもなる不老不死は	70
if	病気にもなる不老不死(笑)がもしタバコもやっていたら	
if 1話	喫煙家の不老不死	74
if 2話	この不老不死はもしかしたらヘビースモーカー	81
if 3話	不老不死との約束の代価はタバコ	86
if 4話	さすがに不老不死は考える	92
if 5話	不老不死の誠意の表し方	98
if 6話	愛煙家の不老不死が考えた友人達の気分転換法	102
if 7話	秋+芋 \parallel がしたい愛煙家の不老不死	108
if 8話	不老不死としての日常は	112

i f 9 話 一度あることは二度ある

117

番外編

番外編 不老不死達は（篠崎葵視点）

122

番外編 不死身兄妹達の平穏な日々（篠崎茜視点）

128

番外編 不死身兄妹達の平穏な日々2（篠崎茜視点）

135

0話 今までの登場人物

名前

篠崎 葵

ふりがな

しのぎき あおい

性別

女

年齢

?? (本編1話) ↓ 25 (本編5話) ↓ 54 (本篇12話)

?? (if1話) ↓ 30 (if2話) ↓ 115 (if9話)

職業

自営業 (本編、if)

その他

気がついたら不老不死になっていた主人公。そのため、主に身長などの成長は全体的に遅め

なので、外見年齢である20代にしてはやや低い身長をしている

ただ何故か病気にかかる不思議な人間

遊○王やゲームなどをよくするため、友人は多め

容姿こそは普通の人にしてはかなりよいが、二次元の美少女の影響で自己評価は低め。服装はシンプルなものを選びがち

髪は黒髪なのだが、原因不明の白髪混じり。髪型は大体肩につくかつかないかの長さを維持している

日焼けするとすぐに赤くなるので、気にしている。肌が白いせいだろうか

ifではタバコを1日少なくて1箱、多くて2箱3箱は開けていたりする

お酒もたしなんているが、黒霧島辺りを飲めるほど強い。少なくとも一升瓶2本あけ、多いとそれ以外もあけたりするのでしばしば橘悠

希と病院送りになっていたりする

本編は生ビールを350の缶を1本から3本なので、i fは相当である。因みに本編は多くても生ビール一升瓶を1本か2本

名前

篠崎 茜

ふりがな

しのぎき あかね

性別

男

年齢

18歳↓23歳（番外編）

職業

自宅業（番外編）

その他

番外編では葵の兄として存在し、彼もまた突然不老不死となる。ただその時からゲームー気質なのと“なつてしまったものは仕方ない”と最終的に考えついた為、やたらと不老不死と便利に扱う方法を探している

特に火を起こせる彼はBBQや焼き芋など日常生活で使っている

ちなみに彼は葵と違い、病気になるにくい代わりに一度病気になる重症化しがち。例えば風邪で2日か3日寝込むなどの体質

なんらかの影響で“俺”という一人称が“私”になっているが、素に戻ると一人称が元の“俺”になる

三人称の“君”や“お前”は相手によって使い分けている

容姿は白混じりの黒い短髪、葵ほどではないものの白い肌と言った感じ

顔も悪くはないものの、オシヤレに気を使わないのもったいなが

られてたりする

名前

篠崎 優美

ふりがな

しのぎぎ まさみ

性別

女

年齢

60 (本編1話、if1話)

職業

神職 (本編、if)

その他

年齢が60歳になる葵の母親

葵の家から見て右手にある神社にて夫と暮らしている

そこそこ有名な神社の分社だけあって、収入には困っていない

容姿は平凡そのもの

髪は濃い褐色だが、歳なため白髪が少し混じっている。手入れが面

倒なのか、短いショートヘアを好んでしてもらっている

日焼けはそこまでしていない

名前

篠崎 翔也

ふりがな

しのぎぎ しょうや

性別

男性

年齢

63 (本編1話、i f 1話)

職業

神職 (本編、i f)

その他

年齢が63歳になる葵の父親

葵の家から見て右手にある神社にて妻と暮らしている

そこそこ有名な神社の分社だけあって、収入には困っていない

巫女のバイトを雇ったりしてるが、葵にも来て欲しいと思っ
たりする

容姿は平凡そのもの

髪は黒髪だが、歳なためか白髪が混じっている

よく外出をしているためなのか、少し日焼けしている

名前

四ノ宮 椿

ふりがな

しのみや つばき

性別

女

年齢

19 (本編1話) ↓20 (本編2話)

30 (i f 4話)

職業

接待業の会社員 (本編)

兼業主婦 (i f)

その他

20歳になる19歳の幼なじみ。葵とは椿が中学生の時からのお付き合い

葵のことは「見た目があまり老いにくい遺伝子を持った凄い人」という認識があるせいなのか、それとも本人が自身のことを卑下しすぎているせいなのかは分からないが、そういった話題になると葵のことを褒めようとする一面も

容姿はそこそこよく、一部が葵よりある。服装は可愛いやおしゃれを選びがち

髪は焦げ茶色の肩甲骨付近まで伸びた髪で、よく一つにまとめあげている

ifだと既に既婚者であり、珍しい婿養子を迎えている
久しぶりに葵と会った段階で子供は1人

名前

橘 悠希

ふりがな

たちばな ゆうき

性別

男

年齢

20（本編1話、if1話）

職業

接待業の会社員（本編、if）

その他

年齢20歳になっている葵のゲーム友達

大体似たようなゲームをしている影響で葵も悠希ほどではないが、一部ゲームにおいておかしな腕前になりつつある

遊○王などもしているので、葵とはよく会っていた

容姿はまあまあよく、良くも悪くも普通な性格。服装はシンプルなものを選びがち

半年に1回は散髪しているの、とても短いことが多い。ちなみに黒髪

日焼けも友人の影響でそこそこしている

ifだと葵が不老不死であることを知っている。なにせ一度葵の死に際にタバコをあげたのがゲーム友達であった彼なのだから

ちなみに彼は前までタバコを吸っており、今はやめている。飲酒は篠崎葵よりも多く、彼は葵と同じか高い度数のお酒を好んでいたりする

本編はifよりもお酒による痛い目を見ない。それでもifの飲酒量に近い飲みっぷりを見せている

名前

一ノ瀬 湊

ふりがな

いちのせ みなと

性別

男

年齢

20 (本編1話、if1話)

職業

接待業の会社員 (本編、if)

その他

悠希の親友で年齢は20歳

小学生の頃からの付き合いで、遊○王なども一緒にやっている

色々と常識人よりなので、葵ともども悠希達などにツツコミをしたりしている

容姿はまあまあよく、イケメンといえはイケメンかもしれない男
比較的よく散髪していて、悠希みたい短い黒髪を維持している
あまり外に出ないのかどちらかというと肌が白い
本編でも i f でも彼はお酒に弱い。ビールを中ジョッキで1杯飲
むと顔が赤くなるほど
タバコはほとんど吸わない

名前

天神 陸

ふりがな

あまがみ りく

性別

男

年齢

25 (本編1話、i f 1話)

職業

医師 (本編、i f)

その他

年齢25歳の医師

葵の担当医を引き継いで数年の医師……なのだが、関係性は数十年
を思わせるときがあるらしい

容姿はなかなかの美男なのだが、オタク気質

髪は焦げ茶色で、やや短めの髪を維持している

葵の担当医になってからというものの、休みがとりやすく夏コミ冬
コミに行けるのが嬉しすぎたあまり、最近日焼けしてきている

彼は少しお酒をたしなんでおり、缶ビールをときおり1本から2本
飲んでたりする。タバコは吸わない

名前

水瀬 紫苑

ふりがな

みずせ しおん

性別

女

年齢

28 (本編1話、if1話)

職業

看護師 (本編、if)

その他

年齢28歳の看護師

基本的には天神陸と一緒に行動していることが多い

周囲に篠崎葵本人かその本人のことを知る者しかいなくなると途端にふざけはじめる天神陸という医師に対して、よくツツコミなどをしたりしているある意味苦勞人

最近は「そろそろ自重してくれないかしら」と考え始めていたりする

い

彼女は本編でもifでもあまりお酒を飲まない。タバコも吸わな

本編 病気にもなる不老不死（笑）の日常など
1話 不老不死は友達と

気がついた時には、不老不死だった。

両親は神の加護がどうのこうのといってたけど、そうじゃないと思うんだ。

恐れるなり違和感を感じるなりしてよ。普通の両親から不老不死は常識的に考えて産まれないから、ね？

あと、もう一つ。

何故不老不死な僕が風邪とかひけるの？おかしくない？

おかげさまで2日、3日風邪で寝込んだことあるんだけど。つらいわー。

その時は実家でもある神社から見て左の一軒家に独り暮らしをしてたから余計に……。やはり持つべきは友達である、と思い知った。

いや、僕に友達がいないみたいない方をしたけど、ちゃんというよ。友達何人か。

何人いるか忘れたけど。数えてないし。

「いやー、だからって春は暇だなー。ゲームのイベントはまだしも、リアルイベントがそんなにやらないからなー」

とかいいつつ、ベッドでごろごろ。

気持ちいい！……いやいや、ダメでしょ。うん。二度寝しかねなくなるし。

「……あ、ラオンになんか来てる」

とか言いつつ、さつきバイブで震えたスマホのラオンアプリを開いてみた。通知は見えないから内容は知らない。

ええと、女友達の四ノ宮椿しのみやつばきからだ。なにになに？

“おはよ”

“今日ヒマ？”

なら、僕は “おはよう。今日は予定あいてるけど、どうしたの？”

……と返信。

うわ、来るの早い。

“よかつたら私達と今から遊ばない？”

こんな朝からなにしてるのやら。ゲーセンだつてあと少しだろうに。

というか他にも人がいるのかな。

それなら “分かった。ただ集合場所はどこにする？” にしよう。送信、つと。

“駅から徒歩数分の喫茶店にいるよ。待ってるね”

…なるほど。なら、あそこだろうし、行く準備して行きますか。たぶんそのまま遊ぶことになるだろうし。いや、今日みたいなラオンの時はいつもだったのを忘れてた。

早くつく方、どっちだったかなあ……。

あれから準備とか移動時間などを含めて数十分。
前についたものの、入りにくい。

ス〇バとかそういうやつは友人とかと一緒ににはいるから平気なの
であって、1人じゃ慣れてないと緊張するんだよ!?

でもまあ、入らないと始まらないからなあ。

♪

「いらっしやいませー」

デスヨネー。

「あつ、きたきた。こっちだよー!」

と、この少し大きめな声で呼ぶのは四ノ宮椿かな。つてだいで見え
やすい位置に…。

あいてすぐに入ったのかってぐらいだね。そうでもないのはまだ
空きのある席を見れば分かるけど。

ん、あとはこっちに背後を向けた人が2人…どっちも黒い髪をあそ
こまで切ってる辺り、男かな。

もう少し近寄れば分かるかな。

焦げ茶の髪をポニーテールにしたラフな格好をしている椿の前に
いる2人はどちらも黒い短髪…だけど片方が腕、首周りの日焼けした
男とほぼ白い男、だね。どっちも春で暖かいだけあって半袖だけど…
と。

あれ、この部分日焼けしてる1人に心当たりがあるような

「あ、なんだ。椿が呼んだ友達って葵のことか」

「あれ？悠希、お前の知り合いだったのか」

「まあな。ゲームで少し…いや、かなりか？それで会って遊んでる相

手だからな」

(相変わらず白髪混じりの黒髪、か。肩あたりにつくかつかないか。ちようどいいよな。もう少し伸ばしたら遊びがいがあるかなんだが……)

なんかすごい髪の毛を見られてるような…。

「なるほど、俺達にはよくあることか。椿は違うけど」

「ちよつと湊^{みなと}!? 幼なじみだからってその扱いは酷くないかな!？」

ハハハ、と気にした風もなく笑う日焼けしてない方の男。へえ、そっちの人の名前は湊っていうのか。

……って待って。幼なじみがいるとか聞いてないんだけど。

「椿、幼なじみって…いたの?」

「ん? ああ、うん。いたんだよ。いやー、この前まで忘れててさ」

(つたく、普通は忘れないよな。数年前まで遊ぶ仲だったんだぞ?)

「湊曰く数年前までは会っていたらしいけどな。あとこいつの名前はいちのせみなと
一ノ瀬湊^{たちばなゆうき}だ。んで、俺は橘悠希^{ゆうき}な」

あ、なるほど。彼のフルネームはそうと。

それにしてもここの4人の中で2人だけ苗字が一ノ瀬、四ノ宮……これ以上はやめておこう。

「そうなるると今来た子が篠崎葵^{しのぎきあおい}さんか。悠希からよく話を聞いてたから知ってたぜ」

「ネトゲ友達の中で唯一の常識人だからな。ついでに俺のツツコミ役」

「君だけじゃないんだよなあ…これが」

(あー…なんかありえそう。葵^{あおい}ってばなにかとツツコミをいれることが多いし。他の人もやってるけど、単純によくつつこんでいるところを見かけるつてもあるしなあ)

「ほとんどその通りみたいだからなんとも言えないんだよなあ……もちろん、俺は話でしか知らなかったけどな」

幼なじみがいたこと自体は知ってるんかい。あ、いや。名前を知ってる時点でそれもそうか。

ほんといつの間に関り合ってたんだろな、この3人は。…やつぱり、ネットか？ネットを多くの人が遊んでるからなのかな？

うーん、風邪引いたりとかさえなければ徹夜でもして、ネット友達増やすんだけどねえ。いや、薬が普通の人みたいに効くからまだマシ…か？

こんなんでも不老不死なんだから我ながら笑えてくる。

「そればかりは仕方ないな。湊はそもそも他にも友達がいるからそっちとも遊ばんとだし。だろ？」

「まあな。というかここで話してるのもなんだし、移動するか」

「あ、それ僕も賛成」

(えっ!?遊ぶとは聞いてたけど、どこへ行くの!?)

「んじゃあ、そうしようか。葵と悠希は後ろで平気そうか？」

「平気だよ」

「あーい」

後ろだのどうだのと話してるのはいいけど、車で移動するよってことを椿には教えてないの？

ラ○ンとかなんか教える手段があるはずなんだけど。じゃなきや椿からなにを言われても反論はー

「ねえ、どつかへ遊びに行くとか聞いてないんだけど?!」

ほら、言わんこっちゃない。……と思ったけど、計画たてる人は僕か湊しかいない。運転するのも湊だけだ。

今回は確か悠希が誘ってきたような気がするから…あー、うん。目的地があればいいレベルだな。

「あー、それはあとで教える。湊、平気そうか？」

「あーい。んじゃ、行ってるよ」

といって席を立つ湊。ちなみにここは注文して支払いを済ませてから席に座るから無銭飲食とは無縁なんだ。

ーというの皆知ってるし、黙っておこう。

移動して全員車に乗った。4人で集まることが多いせいか車も4人乗りなんだよね。

それでときおり考える。もう僕のこととは不老不死じゃなくて、普通の人間扱いでもいいんじゃないかなと。

なのに現実はいよいよね。そんなに病気にかかっているわけじゃないけど、かかりつけの病院と『僕担当』の医師までいる。

ちなみに僕の方が寿命がありまくるから、1回担当になった医師は異動するか、仕事を辞めるまで担当になる。

だからってたまに僕で治験しようとするのはやめてほしい。

つと、話がそれた。だいぶ横道にそれた気がするほどに。

んで今は運転手側にいる湊と僕の右横にいる悠希が行き先を教え
ている。

えーと、確か…どこだったかな。テーマパークだった気がするんだ
けど。

「とりあえず、これから遊園地行くぞー」

「こんな暑いのに!?遊園地へ行くの!?!」

「いやだって水族館だと悠希が飯の話するだろ?動物園だと葵が動物
相手に大変だろ?キャンプとか旅行するには準備が足りなさすぎる
だろ?……他にもあるが、そこがちょうどいいとしか、な」

(まあ、俺は湊が運転するし、楽だからなー。それに椿とか葵といると
楽しいからな。あと葵とは色々と遊べるし。いやー、趣味が近いって

助かるわー)

「あー……それもそうだったね。もしかしたらどの遊園地も混んでそうだけど……」

いやあ、それは仕方ないでしょ。夏だし。あと休みの人もいるんだろうから……うん。家族連れも多そうだなあ。それを言ったら水族館や動物園もそうなんだろうけどね。全部一緒ってね。

「あー、それな。でもたまにや遊園地でもいいだろうって湊が」

「そりゃあね。ゲーセンとか以外で、かつ皆で楽しめそうって言ったらそこしかないからさ」

(あー、確かに。特にゲーセンは私とかあんまり楽しめないしね。遊んでるのが少ないのもあるし。……あとはカードゲームも私がやらないのばかりだし。審判はやってるけど。それ以外だと一生ゲームとかなら楽しいんだけどな。ま、仕方ないか)

「とりあえず、後ろはあんまりふぎけるなよ?特に一緒にすると危険な2人なんだからさ」

「ふふん、僕なら大丈夫だと思うよ……たぶん」

とりあえず自信たっぷりに言っておけば……いいよね?

「俺も平気だな……きつと」

(2人共、最後が聞き捨てにならなかつたような……。まあ、いいや。出そう)

なにかをどこか不安げに考えてそうだった湊が「出るから椿、ちよつと手伝ってね」と言っつて車のエンジンをかけた。

椿は「分かつた」とだけ言う少し真面目な顔をしたような気がした。……そういや、近くの遊園地か。最近行ってなかつたし、楽しみだなー。

2話 不老不死は友人達と共に遊園地で

喫茶店から車を走らせた僕達は途中コンビニよったり、高速道路に乗ったりしてしばらく。

遊園地につきました、まる。

ちなみに運転席が一ノ瀬湊、助っ席が四ノ宮椿、運転席の後ろが橘悠希、助っ席の後ろが僕という感じ。きつと前なのは変なおふぎが見えないように、という配慮？なのか。僕はなにもしないけど。

途中悠希がふぎけそうになって僕もそのふぎけにのりそうになりつつなんとか止めたり、湊が僕に渡していたクイズみたいなのを出してみたりといい暇つぶしができた。ありがとう、湊。

僕も少しは提案手伝ったとはいえ、こういう時は助かるよ。

いや、僕の小さな庭で湊と共にそういうのを作ったりしてるから…どうなんだろう？

悠希に気づかれないようにするのが大変だね！

「あ、そうだ。チケット発券してくるから待っててね」

それぞれが分かったみたいなのを言うのと湊は走っていった。

「そーいやよくあの移動中、ふぎけるの我慢したよな葵」

え？そりゃあ…

「下ネタとかも混ぜてふぎけようにも椿がいるじゃないか。逆に引かれる」

(…変なところ真面目ってどういうことだよ)

「でも、なんか後ろで遊園地についていたらあれしよう、これしようとか相談してなかった？聞いてる限り、ふぎけそうなんだけど」

もちろん、といわんばかりに頷いたのは悠希だった。ちよっ、まだ秘密って言ったよね？

「えっ？する気満々だよ。計画通りに動かないのが俺だから」

(いやいや、自慢げに言うものじゃないよ？ほら、なんか組み合わせる

と危険だと言われた片割れのはずの葬すら遠い目をしてる。……あ、でも少し気になる)

なんか大丈夫かな……下手したら、椿がふぎけ要員になりそうな予感がするんだけど。そうなるであれか。

僕はツツコミかける不老不死か。

いや、僕の不老不死要素目立たな過ぎない？もうどう見ても、聞いても普通の人間だよ？

「あ、気になるか？じゃあ、ちよつと葬にも内緒で……」

「うん、聞く聞く。私もたまにはふぎけてみたいし」

ちよつと待とうか、君達。小声で話してるつもりだろうけど、聞こえてるからね。

それにこんなとこまで来て悪ふぎけとかはさせないからね？

なんてふぎけようとしている2人を止めようとしたりなんてうだうだしてたら、湊が戻ってきた。

「あー……うん。やっぱり葬、お前はツツコミ役だけやってればいいんじゃないかな」

戻ってきて早々の一言がそれかい。僕は皆のツツコミ役じゃないんだぞ。

僕だつてふぎける時はふぎけるよ。それこそ頭を花畑にでもしてやろうかと。

……収集つかなくなりそうだからやめた。

「ほら、湊がそんなこというからさつきから私達のことを葬が呆れた半目で睨むみたいに見てくるんじゃないの！酷くない!？」

「俺達はちよつとふぎけようとしただけなのになー?」

「いや、君達がよくするのは度を越したおふぎけ。僕がするのは運転とかにも支障をきたさないほどの下ネタとか言葉によるおふぎけ」

(あー、確かに。悠希よりはふぎけないけど、俺ほどふぎけるのを我慢

しているわけでもない。…もういつそのこと、そのふざけるのをやめてツツコミをしてほしいね)

「あ、でも葵も酒が入るとすごいよね」

「言うんじゃない、もうすぐ20歳になる椿よ。それに湊と悠希もそうじゃないか」

わざとらしく、そういうと少し笑いをとれたのか笑われた。

いや、今のはそういうつもりじゃないんだよ？なんか違う。

「ぶふっ、湊も酷いってよ。ならたまに酒でも飲みあうか？」

(ぐっ……否定はしないが、酒は危険なんだよな。俺と唯一のツツコミ役にもなれる葵すらふざけすぎるはめになるし、次の日大変なんだよな)

な、なんか湊が気難しそうな顔を…。

とりあえずここは話をそらした方がぶなん、なのかな？

「とりあえずさ、湊が皆で事前に払ったチケットを持ってきたんだから入ろうよ。悠希と椿も」

「ふーむ…ツツコミが似合う葵に言われたんならしょうがない。ということにしよう」

「おお、本来の真面目な葵に……。そうだね、悠希。ちよつと湊のことからかいすぎだし、行こう？」

……ホッ、みたいな顔を見ると湊が僕の顔を見て「ありがとな」みたいな小さなジェスチャーをしてきた。

はいはい、ふざけるのは後回しにしますよ、と。

そりや椿もふざけるとなったら余計に大変そうだしね。まとめの湊、ツツコミの僕でどうにかしていくか。

そう思った僕は急に冷静になった椿を先頭に皆で遊園地の中に入った。

……あんまり変なおふざけはしないように見とかないとね。

おおー……前にも来たことがあるとはいえ、なかなか広い遊園地だよなあ。

「さてと、入ったはいいけど最初はどこへ行こうか。俺的にはジェットコースターがお化け屋敷だな」

（え、ええー!?どっちも絶叫系じゃん!どうしょ…。コーヒーカップの方が私は楽しめるんだけどなあ）

あれ?なんか椿がどこか嫌そうな顔に……。あんまり絶叫系得意じゃないんだっけ?

「悠希、そこは定番のジェットコースターとかじゃないか?葵と椿が乗れるかどうかはともかくとして」

（お、お願い葵。葵から私が苦手って言うってもらえるかな）

あー…椿の方をまたチラッと見たら、まるでお願いするような…。はいはい、なんとなく察したから話すか。

「僕は平気だから乗るけど、椿は絶叫系苦手だから乗らないって。その近くにいればいいよね?」

悠希、君はあからさまに残念そうにしないの。まだ時はあるんだから別に平気でしょ?」

「あー、さすがにジェットコースターは無理させられないしな。ただし、お化け屋敷は同伴な」

「そんな〜!?」

「大丈夫、僕がついてるから」

「なんで葬は怖がらないのー？むうくく……」

そんなすねたような顔で言われてもなあ。死んだり、病気になるよりはなんとも……。それにお化け屋敷って怖がらせるのが目的なわけだし、なんだかなあ。

(そういえば葬ってなにかと落ちついてるんだよなあ。だからズルい……)

「ならとりあえず行こーぜー」という悠希の一言でジェットコースターに向かい始めたけど、すつごい椿から羨望の眼差しが向けられるような。どーゆーことなんだろう。

そういうことで、ジェットコースターのところに並んでいる。並ぶ前に椿と皆とで少し話したんだけど、ホント苦手なんだなあ…と改めて実感した。仕方ないね。

「遊園地だけあつて雰囲気あるよな。ふざけたくなるんだが、ダメか？」

「仲間うちだけでふざけるとしてもあとでにしないか？他にも行く予定の場所あるし」

遊園地遊び尽くすつもりなの!?

と思わずツツコミそうになったけど、口には出てないよね？

「こりゃあ椿が聞いたら前々からツツコミに向いてると思っただよね、とかつて思われそうだな」

「へえ、そうなのか。でも確かにふざける時よりもキレがいいとか、なんというか……。やっぱり葬は面白いな」

(なにせツツコミ部分だけ口に出てたもんな。無意識だろうとは分かってるけど、ツツコミ担当してもらおうかなあ……)

この反応…っ、つまり…

「…どうしても僕がツツコミの方がいいの？」

「だって俺以外に常識あんのお前だけっぽいし」

「いや、あるだろ。俺のふざけに対して色々つつこんでくれて楽しいし」

あ、はい。確定なんだね。しょうがないね。

と、話してたらいつの間にか乗る番になってる。それで乗る場所は…僕と湊が前から二番目で、悠希が僕達の後ろか。

感想としては結構楽しかった。前の方もありだね。真ん中よりも楽しかったし。

出口から出たのはいいけど、椿は……と

「おっ、いたいた。待たせたな」

「お待たせ」

「自由落下決めてきたわ」

あれは自由落下じゃないだろ、と言いたいが放っておく。

(なんの自由落下だし…。むしろそっちの方が怖そうだけど、平気なのかな悠希は)

「とりあえずお化け屋敷行こうか。すでに2人共行きたそうにしてるし」

それにほぼほぼ同時に頷く僕と悠希。

変なところでシンクロするのは大体ゲームで共闘したり、やりあったり、邪魔し合ったりしてるせい。悠希の方がうまかったりするけど、別に今はいいか。

「え、ええー!?どうしても行くの!？」

「比較的並ばない今のうちってね。ほら行くよ」

(そーいや葵がお化け屋敷のことを知ってるっぽかったけど、黙って

るのか？それともまた進化でもしたから言いにくいのか。……ありえそうだな)

ん？今度は悠希がこつちを見てるけど、どうした……？

よくわからないまま、僕達はお化け屋敷へと向かった。見た目は廃屋……というより廃病院だったけど。

結果を言えば、椿が僕と悠希の片腕をつかみ、歩きにくくなったりした。

湊がもちろん「怖いなら途中退室してもいいんだよ？」と聞いていたけど、まさかのプライドで続行。

んで、出てきた頃には号泣。

(やりすぎだな……。悠希達とは後日に遊○王とかで埋め合わせするとして、あとは……)

なにかを考えた湊によって、あとは普通に楽しんだのち、昼食をとってからいつもの場所へ行って少ない時間をゲーセンとかでついやした。

車で送ってもらえるのをいいことに最後にド○キホーテで健全な子どもに見せられない18なガチャを悠希としようとしたら湊に止められた。

ケチ。

2人でそんなこと言ったら僕には軽いデコピンが、悠希には男同士の悪ふざけとも言えることをされていた。

……でもあれ、羽交い締めみたいで痛そうだったけど、いいのかなあ。まあ、いいんだけど。よくあるらしいし。

3話 不老不死の友人の誕生日

まだ春の真っ只中だというのに、僕達は僕の家でトレーディングカードゲームをしていた。

それで、朝食後からさつきまでFPSゲームをしていたのはここだけの話。あとなんか変なものぶん回された。

そういう男が使う18な物は外で振り回さないですよ？と内心思ってた。

ちなみに今いるのは一ノ瀬湊、橘悠希。

んで、男が使う18な物は悠希が持ってきた奴らしく、ド○キホーテのガチャで当たったらしい。僕の家置いていけないですよ、とだけ願っておこう。というかあとで言う。

「昨日今日なのに来ていいと言われるとは思わなかったよ。約1名おかしなものを持ってるけど」

「いやあ、確かに自分の家に置いていかれたら困りそうだねえ」

「おー、なら今度湊の車に乗る時でも振り回すわ」

「そ、それはやめろ?!」

あ、笑ってた湊もさすがに真顔になった。というか対戦してるの君達でしょ。

いくらもう決着つくからってそれは、ねえ。湊が青眼で悠希は機光竜だからってねえ……。いや、僕も調整中を含めれば3つあるけど、湊のとは違って何故か妨害系しか来ないし。機光竜を恐れるのは分かるけど、少しは来てよと。

それはいいか。思考を今に戻そう。

「ところで、悠希はバトルフェイズの最中でしょ？忘れてないよね」「忘れてないさ。リミカをあと1枚使うんだからな」

さつきも使ったよね、そのリミカ。2枚目だよ？

完全にオーバークイルだよ。なにせ湊に伏せカードは残されてないんだし。一応青眼の精霊龍と青眼の亜白龍がいるし。墓地にもそこそこいる。禁止カードに行行って辛いカードもあつたらしいけど、仕方

ないね。

そもそもなんで遊○王をやってるのか僕も分からない。確かFP Sをやった後モ○ハンするとか言ってたっけ？

でも想像はできたかもしれない。なにせデツキを持ってきたと最初に言われていたから。

ちなみに新マスタールールだったりする。

(俺も色々としたのに今回は負けるとかさすがだよ。ほんと、その男が使う18な物さえ持ってこなければな。そのせいでなんか台無しな感じがする)

(湊が呆れてる、か。なんとなく察しはつくが、楽しいからやめないんだけどな！)

ま、楽しそうだからいいんだけどね。僕も楽しいからいいんだけど。

だからあえて止めない。酷ければ止める。

ーそういや、それを抜きにしてこの2人は何故僕の家に来たんだろう。遊びに来ただけなのか。

すっかり聞き忘れていた気がする。

「ねえ、そういやいつもみたいにも用もなく遊びに来たわけじゃないんだよね？」

「ん？ああ、よく用もなく遊びに来たことがあるから仕方ないな。：

あれ、湊。なんか用あったっけか？」

(墓の家に行く途中確認しただろうに……。俺が言うか)

「遊びに来たのもあるが、椿が今度20歳になるだろ？その祝いも兼ねて国内旅行はどうか、ってね」

小旅行とかそういうやつかな。

「あ、それ何泊する予定なんだ？あと時期とか。場合によっては俺も運転できるか？」

「スピード出しそうな予感がするからお前はなし」

「湾岸とか頭文字とかやってるらしいしね、危なそう」

「確かに否定はしないけど、お前ら俺のことをどんな目で見てるんだよ!？」

「スピード狂予備軍」

ハモった。

というか考えること一緒なんだね。

(そりやあそうなるよな。普段から「免許をとったら高速道路でスピード出す」とか言ってるし、その悠希の友人は最高130キロ出したとか言ってたし、可能性はくはないからな)

呆れてるのかなんのかは分からないけど、半目で悠希の方を見るね。うん、湊。僕もきつとそんな感じで悠希を見てると思うんだ。

性格的にありえそうだからね。死んだら元も子もないんだよ？熱中症で1度死んだことある僕が言えたことではないけど。

「とりあえず悠希と交代はなしにしない？さすがに危ないというかなんというか……」

「んだな。さすがにそれでオービスに照らされてもたまったもんじやない。なにせ俺の車だし」

「ひついでー扱いだな、俺。確かに湊と交代するなり借りるならしよるかと思っただが」

そう思うんなら笑いながら言わんでも…。

まあいいや。元の話に戻そう。その方が早そうだし。

「とりあえず樁の誕生日を祝うってことだよな？まだ日にちがある気がするけど…」

「あー、まあね。でもほら、早めの方がどこぞの誰かさんを巻き込みやすいからね」

悠希をチラチラ見ながら言ってるあたり、もはや隠す気ないよね。

というか計画を立てておいても壊しにかかってくる人をどう巻き込みやすいのやら。

(それにふざける奴にも「一応」教えていた方が安全そうだからな。
：関係なさそうだとしても、ね。結局ふざけるだろうし。というか葬
のその顔、呆れてるのかなんなのか。よく分からんな)

「あ、場所ならUFOキャッチャーがたくさんあるあの場所かユニ
バーサルなスタジオとかいいんじゃない? それかハ○ステ○ボスはど
うだ?」

え、ええー……と引いた感じに呟いたら湊とかぶった。だって一つ
目は普段行く場所の延長線上でしかない気しかない。

「おいおい、お前なあ……。なんで葵の家に来たのか分かってるのか
?」

(あれ、遊びに来たのがメインじゃなかったのか!? これから湊もそう
なってくるのだとばかり思ってたんだが…違ったのか。こいつが真面
目気味だからか?!)

驚きの顔をしている悠希に、呆れたように「はあ……」とため息を
つく湊。

案外仲がいいのかもかもしれない、なんて関係ないことを考える僕は
きつと悪くない。

あ、そうだ。

「ならば、前とは違う遊園地とかどうかな」

「おっ、それいいね。どこ?」

そう聞かれた僕は湊達に調べながら教えることにした。

そういえば気がついたら一ノ瀬湊って人と名を呼び捨てにしていた。友人の友人はまた友人って？

どんな理屈だよ。まあ、僕は気にしてないし、相手も流してる感じだから別にいいか。

あれから数週間、椿ともしつかり遊んだりしつつ、ラオンでその初めて行く遊園地？の場所を調べた僕達は湊の運転でそこへ向かっている。高速道路も使って、ね。

あ、そうだ。まだ向かってる最中だし、少し道が混んでるからあえて僕のこと話しておくかな。

さらっと冗談気味に言えば気づかないでしょ。

「ねえ、ちょうど渋滞気味だからいうんだけどさ。僕って不老不死なんだよね」

（葵もなかなか変な冗談いうよね。春になる前に2、3日前後も風邪で寝てたっていうのにさ。私が主に手伝ったの忘れてないよね？）

いなり苦笑された。いやいや、そこは笑うって場面でいいんだよ？冗談気味に言った意味がなくなるんだけど!?

「葵にしては変わった冗談だよな。湊の幼なじみから春分の前に風邪を引いたって聞いたばかりだぞ」

「そうそう、そうなんだよ。葵ったら、なにをどうしたのか風邪を引いてさー。病院に行くから症状が和らぐまでしつかり看病したのに

ねー」

「ああ…うん、そだね…」と返したものの、我ながらどうしたものかなあと。

そうか。冗談として笑われるんでなく、苦笑されてるのはほぼ最近に風邪を引いたからか。

まったく、泣けるよ。

「そこまで聞くと不老不死なのか、ってレベルの話に感じるが…なにか確認する手立てとかないのか？」

「えっ？硫酸プールとかじゃないのか？」

「……りゆうさん……」

(ちようど私の後ろにいる葵の顔をバックミラーで見たら呆然とした感じの表情になってる。確かに硫酸とか結構痛そうだもんね…。それ以前に)

「それってさ、悠希。プールも溶けちやいそうだけど…」

「いや、椿のつつこむところはそこじゃないと思うんだが？」

「湊もそこじゃない。硫酸プールとかどんな冗談なのかなって。さっきのは冗談に聞こえるようにした確信犯の僕が原因だけどさ」

「おふぎけなら、そこまでするに決まってるだろ？なんなら崖の上からでも……」

「あつ、遠慮いたします」

思わず半ば棒読みでそう答えると、他の皆が笑いだした。

いうタイミングでも、悪かったのかな……としか思えない。いや、

風邪引いた僕も僕なもんだから余計だね。

「……ってあれ？高速道路降りるの？」

「うん、そうだよ。んだから結構遠くまできたけどね」

そう聞いてるとだいたい長い間話していたような気もする。…短くも感じる？

いや、たぶん途中からあんな冗談を混ぜた自分のせいだろうけど。やってしまったのなら仕方ないけどねっ。……ね。

ひとまず、ワンデーパスを椿を除いた全員で買って中へ入った。想像よりも広い、かもしれない？

いや、無意識にはいえディ○ニーラ○ドと比べちゃダメだね。

「おおー……ここがよ○う○ランド？」

「そうみたいだね。ちよつと僕も年甲斐なくワクワクしてきたよ」

「いや、お前いくつだよ……」

「せ、精神年齢はやや高めみたいだもんね？仕方ないんじゃないかな」椿が驚き混じりに言ったことに対し、悠希に呆れられた。湊は……うん、その、フォローありがとね。僕自身の見た目の年齢若干忘れてたし。知り合つて間もないのに凄いとかが、思つてないよ？……はい、思いました。

（ああ、確かそんなこと湊に教えてたっけか？やけに大人びてる時があるとかどうかかって。忘れかけてたわ）

「とりあえず、こつちいこ？」

その椿の一言に僕以外の誰かが「そうだね、主役もそういうことだし行こうか」ということになって遊んだ。

数時間後。……遊び疲れた。

ほんと何時間遊んだんだろうね。もう分らない。

悠希もさすがに洗濯機の音ゲーか二対二のMSなどの対戦ゲームしか遊べないとか言ってきた。

余裕あるじゃない。

「んで、高速に乗って戻ってきたわけだけども………葵と悠希はそんなにお酒飲んでるの？確かに夕食で椿を祝おうって話にはなってたけどさ」

「え？祝うんなら景気よく、だろ？」

「それにどんよりしてるよりはマシだもんねー」

（いや、そうなんだけど。そんな2人と1人に祝われて嬉しいって思ったけど。お酒類飲みすぎな気がする。二日酔いするから椿も気をつけるんだよ、と言ったわりに……。これって私に言えないんじゃないの？）

「……倒れないですよ？あと二日酔いも気をつけてね。つたく、さつきまで一気飲みはダメだの飲みすぎはいけないだの言ってたのにしよぅがない人達だね」

「逆にこの2人を反面教師としてさ、お酒はほどほどにするっていうのを覚えたら？……あ、俺はまだお前達……いや、君達を送るのが残ってるから飲まないけど」

「ほんとそーゆーところは律儀だよな。助かるぜ。あ、これ俺の車代な」
笑いながら、といつても十分他の人達で賑わっている飲食店で悠希が対面に座る湊に手渡した。あ、僕も渡そ。

椿の分もついでに。

「あ、僕もはい。椿の分もあるから」

「えっ。いや、自分でだ」今日が誕生日の人は黙って払われてればいいんだよ」

（うん、なるほど。今更というか改めて悠希の知り合いについて考えるとほんと色んな人間がいるなあ……と思えるよ）

「というか葵……お前さ、いつもより飲んでね？平気なの？いや、飲み足

りないならまだいくけど」

「んー、やめておくよ。これ以上飲んでどつかの担当医に小言を言われたらたまないからさ」

「ああ…そうか、お前そろそろ健康診断を病院に予約しに行くんだもんな」

2年あまり付き合ってる悠希だけは納得したように頷いているけど。

と、おや？ 湊も納得したように見えるような。

「悠希と違ってそんなに飲んでないってことかい？」

「俺と違ってってどーゆーことだよ!」

「アハハハッ、確かに湊からよく友人の悠希が酒飲み過ぎてそろそろ肝臓が危なそうだって言ってたもんね」

…：…あー。むしろドクターストップ、もといドクターオーダーされそうだね？

それより本来はドクターオーダーっていうとかよく分からないね。英語は難しいわ。

皆、お腹がだいぶ膨れたということ。今回はお開きになった。

最後、椿は優先的に帰してもらい、悠希は僕の家でお泊まりすることになった。というか泊まる宣言された。

確かに椿達よりは家が近いとはいえ…やれやれ、仕方ないな。

「まっ、単純に飲み足りないだけなんだけどな。悠希とその幼なじみの椿には内緒な？」

それ、家にあがってから言うことか。

あと少し千鳥足気味だよな。大丈夫？ お酒だいぶ飲んでたし、仕方がないのかもしれないけどさ。それに僕よりも飲んでたし。

「…：…それはいいけどさ、それ以上飲んでまた病院行きになっても知らないよ？ 前回もそれで夜中に救急車呼んだんだからね」

「あー、あの件は悪かったな。でもうまいのが悪い」

(一気飲みして落ち着いてられんのは自分家か葬じぶんちの家だけだからな)

それを聞いてため息ついてたらもう台所に行ってる。ほんと、僕の

家に自分が飲む酒を持ってくるなんて悠希の家じゃないんだからさ。

……あー。とりあえず、明日は二日酔いかなあ。

そんな重い気持ちで、僕は楽しそうにリビングでまた酒を飲み始める悠希の近くへと向かった。

4話 不老不死は不老不死だった

初夏の頃、梅雨にもなりそうな時に僕は……いや、僕を含め数人で病院に来ている。

会社でもう健康診断を受けた人もいるけど、その健康診断に含まれない健康診断も込みでやりに来ているらしい。

生真面目な。そう思ってたけど、単純に僕をからかえるから、だそうだ。

訳が分からない。

「そんな複雑そうな顔をしない。だからからかわれるんじゃないの？」

「……他の友人がからかってくるのは僕が健康診断に来てるからじゃ、ないんだよなあ」

「へっ？」なんて言って困惑した表情をする女友達。この人はからかっこない少数派の人だから普通にね。

あれ、というか前に教えてたような気がするけど。忘れたのかな。

「ほら、僕の担当医。その人が健康診断の時も担当になってるんだけど、僕のことをたまに不老不死って呼んじゃうんだよ」

不老不死ってのは間違っではないけど。

（あー、そんな感じの話聞いたことあるような。忘れてたんだっけ。うーん……いつか）

「健康診断に来てるのに不老不死って呼ぶなんて変わった担当医だよね。中二病ってやつなのかなー……」

彼はさすがに違う。中二病そっちじゃない。

とは言えないんだよね。まさか不老不死が、健康診断しに来てるなんて普通は思わないし。

しかも健康診断をする理由が病気の初期発見だからもう。普通の人間かっ”とかって言われそうだからまだ担当医にも黙って……あ、バレてそう。

「……とりあえず、僕はそもそも呼ばれるのがだいぶあとだから一狩りする。たぶん反応にぶくなるかも」

「へえ、そうなんだ。それにしてもゲーム機は持ってないようだけど？」

「スマホでするから」

「へえー…」なんて納得したような声の後

「でも、呼ばれるのが遅いからって一狩りしてて行けないとかないよね？」

「…そうだね、それはそれで面倒だから別のゲームにしておくよ」

（あ、もう時間決まってるんだね。なら、少し困り顔で笑うのも納得。…それにしてもあおいちゃんも律儀だよねえ。こうやって毎年健康診断に来てるみたいだし）

「んじや、また今度ー」

「ん。また今度ね」

なんか行く前に微笑ましいものを見るような目を向けてきたな。こういう時、心を読む力があつたら便利そうなのになー。

あーあ、なんて考えてたら僕も呼ばれた。

呼ばれたと言つても、やることは普通の健康診断と同じなんだけどね。

違うことなんてむしろしないし。たまーにアルコール値？だったかな。それが怪しい数値になるだけで、それ以外は健康そのものだし。

「んで、不老不死の篠崎葵さん？最近なんともないよな？」

僕の時だけ敬語やめるのはどうしてなんだか。

というか看護師も同伴なのね。他の人だと看護師だけ、とからしいのに。というか3人きり？といつても不老不死とハッキリいうのは危ないんじゃないかと。なにが危ないとかよく分からないけどね！

「うん、まあね」

「あ、そうだ。水瀬紫苑、あれ聞いといて」

「…なら天神さんが席を外してから聞きますよ。 magari なりにも殿方つていうのを忘れないでいただきたいですね」

ああ、そういうのを受けますかって話かな。確かに陸さんは男だし、そういった手の話はしづらいわな。

…目を、キラキラさせていなければ余計に。

「忘れちゃいけないさ。でもね、やっぱり医師として興味がわくというかなんというかー」「はい、それ以上はダメですよー、天神せんせ？」

（俺だつて分かつてるさ。そういうことぐらい。言い訳にすらならないとはいえ、やっぱり不老不死が病気になるっていうのに興味がつきないんだよな）

天神陸つて人が奥に渋々行つてから、その質問に対して頷いておくと看護師の水瀬紫苑つて人が「とりあえずあとでしつかり伝えておきますので、採血の方へどうぞ。あ、気分悪くしたことはありませんか？」とか聞いてきたのでとりあえず「いいえ」とだけ言った。

…その人、色々大変そうだなあ、と他人事ながら思った。

そのあとは何事もなく進み、健康診断の診断待ちとなった。

ただ帰り道、ラ〇ンを見たら遊ばないかって感じの誘いが来ていたから暇だし行くことにした。

とりあえず家を知ってるらしいから一狩りしよう。

来たらチャイム鳴らしてね、とか僕も行くよとだけ返してひとまず帰ることにした。いつまでも空腹でかつゲームしないつてのは気持ち嫌だ。いや、しないといけないわけじゃないからいいんだけどね。

モ○スターハ○ター：ワー○ドのア○スポー○で一狩りすみそうな時にチャイムが鳴った。タイミング悪い。今雷顎竜にドクロマーク出たばっかりなのに。

捕獲しよ。

……あれ？友人ならまたチャイム鳴らすなりなんなりでそれらしいことしてくるのに。

まさか最近噂の空き巣？テレビとかでやっていたような気がするけど。確か我が家は防犯ガラスだし、窓も二重ロックだからしてある場所が全部だしと……まあ、遊んでやるにはちよっどいいかな？

僕はこっそりと自室を出ると玄関側に出て、鍵を二つかけた上にチェーンロックもした。開けるのに苦労するだろうなあ。反応が楽しみだ。

ま、せいぜい不老不死の住む家に不運にも侵入してしまったと後悔するがいいんだ。

そこまでしてから相手を探したら、2階にいた。

わざと音を立てて近づいたので、驚かれた。

「なっ！住民いるじゃねーか！」

「いない時間の方が多かったから分かるわけねーだろ!？」

いや、そんなに家あけてないんだけど。確認不足すぎない？それか他の家と間違えたか。不用心な。

あ、相手は男2人だからそうでもない？

(な、なんだこいつ。急にニヤつきやがって。まあいい。どうにか縛っておくか)

「なあ、こいつどうする？」

「どうするもこうもー」

「ふふつ、アハハ、アツハツハツハツハツ、アーツハツハツハツハツ！」

うん、普通は突然笑いだしたら「なんだこいつ」にもなるよね。でも知ったこっちゃない。

なんとしてでも我が家から穏便に出てもらおう。

その後、何回か殺されかけたり、思わず殺されたりしたけど、狂ったかのように笑い続けていたら向こうの方から逃げ出した。

おまけに「うわあああー!!」なんて情けない声を出しながら。

あーあ、片割れはおもらししてたのに。そのことを最後の最後に教えようとしたのに、今の叫び声で逃げるんだよ。酷くない？

それでさらに後日、とある男2人組が自首してきたと言うニュースが朝流れた。むしろ拘留所にいたいとかどうか。

うーん、僕がしたことといえば、出来る限り素人なりに相手を逃げ出しにくくしながら笑い続けるっただけなんだけどな。そんなに酷くしたっけか。

ちなみにそのあと、椿達友人から「あの時の血はどうしたの!?大丈夫!?」とか「空き巣に入られてたとか平気だったの!?」とかと質問攻めにあつた。

うん、平気平気。楽しくて悪ノリしただけだから問題ない。

5話 不老不死と仲の良い人達

初夏に入りそうな頃、健康診断の結果が来た。うん、問題なし。でもなんか年齢のところが30にされてる……。僕はまだ25歳なのに、四捨五入されてる。

なにをどうしたらそこになるのやら。というか酷くないか？泣くぞ？泣いちやうぞ？

あ、玉ねぎないと無理か。つてそうじゃなくて。

どうも天神陸って人は僕のことをからかいたいらしい。そんなに不老不死が珍しいのかな？……あ、いや珍しいか。

まあ、今日は休みつてのもあつて衣替えとかを家でしていた。

もう全部をやったけど、たぶん問題ないはず。寒くならなければ、ね！

それで、外に出たら玄関先に悠希と男友達がいた。

まあ、男友達の外見はどこにでもいるような感じで、4〜5歳の歳の違いがあれど、男の平均値は少し越してるんじゃないかな。

「どうしたの？君達。僕の家近くになんて来て」

「ガ○プラ作ろうぜって誘おうと思つてな。な、悠希」

大きく悠希が頷いた。

それにしても悠希だけちよつと手さげ袋が大きくない？

「そうそう。あとついでに作ろうぜってガン○ラを一つ持ってきた」

(単純に作らせたくて持ってきたんだけどな。葵は異性の中で比較的そういう手の話の分かる数少ない方だからな)

なるほど、作らせるつもりだと。

まだ僕には組み立てると園児か小学生くらいのサイズのある赤いモビ○スー○を作ってる最中だつていうのにさ。

塗装も大変とか泣くぞ。

「…今作ってるのが終わったら作ることにするよ」

（あー、今作ってるのって前回持ってたらしい「ネ○・ジ○ング」だったもんな。そりや苦勞もしそうだ）

もしかして、悠希は忘れてたり…：はしないよね？僕に持ってきたのは悠希だし、男友達は誘われて持ってきてるっぽいし。

まあ、塗装とかその他道具を僕が持つてるからってのもありそう。良い値段するんだよ？あれ。

「ん、そうか。それもそうだな。ちなみに今回は俺の好みだ」

「なら自分で作った方がいいと思うけど…」

「いやあ、スト○イクフリー○ムとユ○コーンとで悩んでな。んで両方買った方がいいが、1人じゃ時間が足りない。ならば一番作り方の近いお前が適任ってね」

これはひどい。

いやまあ、ネ○・ジ○ングについては悠希も手伝ってくれてるからいいんだけど。僕にとって時間は有限だし。…：無限だろ、と思った人は回れ右。

って、誰に言ってるんだろうか。僕は。

「共同作業ってか。俺だって最近の上達したろー？」

「そりや最近僕^葵の家に来てるからでしょ」

「君らさ、ちよつと辛辣すぎない？そんな最近ってほどでもないと思うよ？…：そりやあ、確かに俺は清掃業だし、なかなか休みが取れないしと遅れはとってるけどさあ…」

「休憩時間もあつてないようなものだし…」とまで呟き始めた。

少し意地悪しすぎたかな。まあ、僕の方は「気分転換」を兼ねてるし、あまり度が過ぎないようにしないと相手に悪いからね。

というか僕だって納期とか色々大変なんだよ？あまり間違いがないようにしないとだし。

「趣味のことをする時ぐらいはそういう話なしでしょ？」

「そういうお前はたまに口から出てるけどな。性^{さが}なのか？あれ。いや、お前…いや、葵が自営業みたいなのをしてるのは前にゲーム中教えてもらってたが、そうなるとお前達ってよくBFのあれについて

「これだよな」

(BF?……ああ、あれか。あのありえないほどの練習か。篠崎さんは普通に最後まで出来てて凄かった記憶しかもうないな)

「僕は特殊な訓練を受けてるからってテンプレを使うとして…君はよく平気だったね」

「平気もなにもきつかったけどな！最初辺りから最後しかもう覚えてないよ!?ほんと、あれ以来徹夜はしないと心に決めてたほどだからな」

ああ、それで “有給休暇がなかったら大変だった” って話になるのかな？

……うん、やっぱり僕のが他の人と比べてややおかしくなってるね。感情を押さえ込みすぎてるわけじゃないはずだけど…不老不死だから、かな。

それこそ身体的な病気にならなかつたら、気づかぬうちに感覚が麻痺しそうな気もする。

「そりや普通は大変だからな。俺だってやれたのは学生だからだな。…でもなんだ。巻き込んだのは悪かったな」

「全くだよ」と呆れたように言う男友達。ところでそろそろ家に入らないか聞くな。すっかり話に夢中になってて忘れてたけど。

「あ、あー…今さらだけど、君達。ガン〇ラ作るんならあがってくよね？」

すんなり頷いて「おう、今日は休みだからたまには作りたくなつてな」と言つて玄関に上がる短い階段をあがってきた。

「いや、俺は置きに来た。ちゃんとした休みの時にでも作りに来るよ」

「あ、そうなの。なら預かっておくね。……ちなみに今日はどうしてきたの？」

「そりやあ…君達と少し話したくてね。独り身であんまり遊びに来る人が少ないと寂しくもなるんだぞ？つと、そろそろ帰るな。じゃあ」

「うん、またね」と言つて別れたあと、僕も自宅へ入った。

玄関から入って前にある扉をあけると悠希がテレビをつけて中間に置いてあるテーブルの方にいた。

いやね？リビングに入ればテーブル、椅子があるのが見えるとはいえ、慣れすぎだと思うんだ。

まあ、悠希自身の塗装分も置いてってくれてるから助かる。マスクとか含めてね。

「おう、あいつ帰ったのか」

「仕方ないね。たまにはまともに休みたいんでしょ？……んで、今日は時間になつたら帰るの？」

そう聞くとすぐに首を横に振られた。

え、あの手さげの中にお泊まり用も入ってたの？もしかして、その少し大きめな肩掛けかばんもそうだったりするのかな。泊まる気満々じゃない。

「泊まるつもりだ。んなもんで夕食分のある程度は冷蔵庫に入れさせてもらったぞ」

「はいはいどーも。とりあえずお昼と明日の朝食用ぐらいは買ってくるよ」

「へーい、んじや俺は軽く組みたてしてるわ。それかスマフォで遊ぶ」
「そうか。ま、ならいつもの通り僕の部屋には入らないでね。2階にある書庫兼寝室とか風呂にトイレならいいから。あと正面に見える部屋も平気だからね」

（ふむ、やっぱりダメなのか。……手をヒラヒラさせながら出てったし、時間がかかりそうなら少しだけ、見てもいいかね。一緒に読みたい本があるとか言ってたのに忘れるあいつも悪い。ってなわけで）

とりあえず、近くのスーパーでいいかな？

そう考えながら家を出た僕だった。

6話 橘悠希は人の日記を見て

葵が出ていった後、俺はこっさりリビングからあいつの部屋に入った。和室なだけあって畳の匂いが良いね。

つとあまりリラックスできないんだよな。

んで？右奥に座椅子にパソコンがあつて、その手前側に遊ぶ用か。左側の奥が空いててその下段、中段にPS3とPS4を置いてるんだな。……外付けHDDとかマスクとかを空きスペースに置いてるのはすき間を埋めてるのか？

別になんでもいいが。

左奥は細めのタンスが2つあるだけか。んで、本棚が…あれ？左手前と右手前にあるんだな。左手前の方が大きい本棚だけど、ほとんどライトノベルとかコミックだな。

「俺が勧めた本もあるのか。律儀に分かりやすく置いてくれているとか真面目なやつだな」

それで、右手前のはスライドする部分もないし、ライトノベルとかつぽくないが………少し分厚いが、日記か？しかも、何冊はあるのか。

ふむ、あつちから「今度2人で読もう」と約束した本を探すよりはこつち読んだ方が早そうだな。

どれどれ、と読んでみた日記だったけど、最初は普通の日記だな。

書き方も片ページってところか。ま、別にどうしたって話なんだけだな？人それぞれだし。

「……ん？……こだけ乱雑だな」

今まで、ひらがなと習いたての少し歪な漢字が続いた日記の中でやけに乱れた文がある。

〃〇〇〇〇年△月□□日（晴れ）

きょう、お父さんとお母さんとわたしと友だちとで、こうえんにいききました。

お父さんとお母さんの言うとおりに水分とってたのにねっちゅーしよー？つていうのになつた。死んだみたいなかんじとか、ものすごくあついようなかんじとかしたつて言ったのに友だちのおやといしの人しかまともいきいてくれなかつた。ひどい。

それにしてもふじみ？とかふろうふしつて……かごでもなんでもないと思う。

お父さんとお母さんはにじげんつていうよく分からないのにむちゅう？になりすぎ。この日ほど〃おちついてほしい〃つておもつた日はないと思う〃

あー、うん。なるほど。両親に熱中症の知識は無かつたけど、二次元への知識とか子供への愛情はあつたと。

何だこの矛盾どころかさすがに他の子供の親に聞けよ、と考えてしまいそうな案件だな。

んで、この後からふざけたりするようになったんだな。確かにふざけるのは楽しいもんな。

「というか、それで気分転換になるのか。凄いな。……あ、ところどころ風邪ひいたとか書いてある。……ん？……こだけおかしいな」

〃〇〇〇〇年△月□□日（晴れ）

不老不死になつてから何年たつたか。

高校卒業をしたとはいえ、成長が著しく遅くなつた気がする。いや、明確に感じたのが卒業した日だつたつて。

それでも誕生日で言えば今年の夏で23歳になるのにな。……ま

だ見た目がまだ18か19歳みたいに見えるのか。いや、見えてるから違和感なく卒業できたのかもしれないけど。

逆に入学もしかりだろうから、なんとも言えないね。

まさかと思ひ、一人暮らしにさせてもらってから傷をつけてみよう
と実験した。

結果で言えば背中にもう二度と消えぬ傷跡になった。医師からそう告げられたので、今は消すのに努力している”

これで二年前かよ。小学1年生からずっと書いてるとか生真面目
だな、おい。

「……お？これ、最近の方だな」

ああ呟いたはいいが、そろそろ戻ってきそうな気がする。まあ、見たら悪いつてのを分かった上で読んでるんだ。

何を今更。ってことで読む！

〃〇〇〇〇年△月□□日

最近健康診断を受けた。春だからか花粉症の人がちらほらいた。
あと少しとはいえ、毎年辛そうだね。

そういえばショックなことが一つあった。

二年前に作ってしまった自業自得の背中にある火傷の跡が消せな
かった。

あの時実験と称してやらなければよかった。ほんと、なにがいけな
かったんだろう…。わけがわからないよ”

「消えなかったのかよ！」

「そうだよ、消えなかったんだよ、悪かったね！」

おおっとー……う？これはー？

まあ、後ろにいるのは確定だから、そのまま手にしてた少し分厚い
日記を戻してー

「おう、おかえり。昼食を先に作るのか？なんなら微妙に手伝うぞ」
「うん、その微妙な手伝いに関してツツコミたいけど、そうじゃないよね？」

(なにせ入ったらダメって行った場所にいるし。：もしかして僕が見つけた面白い本を教えるって言う約束を忘れかけてたのが悪いとか、ないよね?)

うん？なんか複雑そうな顔してるけど、ようやく思い出したか？

俺だって知りたかったんだぞ、別の人のお気に入り作品。価値観が違うのは普通だしな。いや、好奇心の方が大きかったただけなんだけだな。

黙ってればバレないべ。たぶん。

あ、なんかため息つかれた。

(やれやれ。ともかく日記を全部読んだと見ていいだろうね。あの時はタイミング的に僕の不老不死は冗談って受け入れられたけど、どうしたものかな)

「お、そうだ。葵、ちょうどいいからガン〇ラ作る前にお互いのオススメな小説教えあおうぜ。それが決闘^{デュエル}しようぜ」

「……はい？いや、ここに来たのはプラモを作るためじゃ…」

目を少し大きくしてる辺り、驚いてるのか。全く、不老不死だとかなんとかが本当だとしても病気になるとかある意味バグってね？

もう老いないと死なない以外に不老不死要素ないじゃないかよ。ひでーな、そよバグ。直せないんだとしたらたちも悪いな。

「ん？ああ、そうだったな。んでも約束忘れるお前もお前だからな？」
「アツハイ」と困ったように笑いながら葵が言った。

いや、人のを勝手に読んだ俺も悪いんだけどな。

「……まあ、なんだ。葵。お前の日記を勝手に読んで悪かったな」

「はいはい、それならいつも通りに接してくればいいから。というか今回素組みで済ませないよね？」

(いつも真面目にやると面倒とか言いつつ、僕の家には本格的な塗装道具を置いていくんだよね。一人暮らしじゃなかったら置く場所少ないんだからね!?!……いや、そもそもツツコミどこはそこじゃないような……)

軽く受け入れられたが、まあいいか。

というか接し方を変えようにも老いしないことに目をつぶれば普通の人と一緒だろと。あと変にふざけなければ死なんだろう?と。

お前、瓶ビールすら少なくて一本、多くても二本か三本しかあけないのによく言うわと。……いや、俺は黒霧島とかだから訳が違うか。というか不老不死ってマジな話なのか?にわかにはやっぱ信じがたい。

「不老不死を相手にしていつも通りに接するとか二次元でよくいる主人公じゃないんだからふつーは出来ないだろ。まあ、お前の場合、どう見ても不老不死っぽくないから平気だが。あ、ネ○・ジオ○グとかあるし、分かんね。とりあえず作ろうぜ」

(うん、普通はこうか。あの両親みたいに「次元の力が使える」とか「不死鳥だかフェネクスの加護」とか言わないんだね。というか不死鳥とフェネクスって一緒だと思うんだ。むしろ彼みたいに……いや、彼はちよつと流しすぎじゃない?信じられにくいのは分かってたけど)

ん、なんか考えるような顔しながら部屋から出ていこうとしてるな。せめて一言ぐらい伝えておくかな。

「そうそう、葵。お前の不老不死が本当かどうかはともかく、あんな実験するとかどうかと思うぞ」

「うん、そうだね。後悔先にたたずとか言う通り、すごく後悔してる。なんで消えないのかは分からないけど、とにかくヤケドさせなきゃよかったと思ってる。もうなにをしても手遅れだけだね」

そう言いつつけっこう渋い顔をした彼女は困ったような笑みを浮かべたと思つたら」と、とにかく組み立てようよ、ガ○プラ。ね?」と

言って部屋を出ていった。さすがに分かっているのか。信じられにくいことぐらい。

でも一応今は信じておくか。あいつ…というか彼女はそんなに嘘つかないからな。なら、そういうことで嘘はつかんだろ。

ま、嘘だつたら嘘で今後そのネタで楽しませてもらうが。

本当に不老不死かは後々分かるべ。まだ俺らも若いし。それにまだいくらでも時間はあるしな。まだ頭の片隅に残しておいた方がよさそうだ。

いやあ、今は組み立てが楽しみだ。ヒヤツホイ。

7話 不老不死の日常

梅雨が過ぎて夏が来た。すごく、暑い。ほんと、こういう時期は苦手すぎて半分死んでたい。

あ、やっぱり普通の人から外れまくるからなしで。あとそれほぼ無理だし。どうやって半分死んでるつもりなんだと。

考えなしもほどほどにしよう。うん。

~~~~~♪~~~~~♪

「…ん、電話?…椿からか」

出ると、明るく「おー、久しぶりー」と挨拶された。

買い物してるとたまに会うんだから久しぶりもないと思うんだけどね。

「この前、買い物してる時に会ってるんだから久しぶりじゃないと思うよ。それで、どうかしたの?」

『2人きりの女子会でもどう? って思ってた。だから水族館とか、テーマパークとかに行かない? 今からでも、明日にでも』

「ん、久しぶりにいいかもね」

こういうのはのっぺおいた方が色々とメリット多いしね。自分は幼なじみと仲良くできて、ネガティブ思考とかを振り払える。

んで、向こうも気の許せる相手と行くなら楽しいんじゃないか、と勝手に思ってる。もちろん、心なんて読めないからねえ!

さとり妖怪とか異能のさとりとか覚りみたいなのはできないしね!

まっ、そもそも相手とはライ○通話で話してるからあったとしても聞こえないだろうね。

『でしょでしょ? お互い気が許せるし、休みに羽広げるにはいいと思うからこそ行こう! ちなみにどこがいい? 私はハ○ステ○ボスかな!』

「いつもそれ言ってる…? んー、なら僕は夢の国かな」

『あ、そこならシーの方行きたい！いや、女子2人ならランドも捨て難いよね…』

その後、『どっちもいいし、ハ○ステン○スだっただろいいだろうし…うーん…』とか呟き始めた。

そ、そんなに悩まなくても…。ならいつその事2日連続で行けばいいんじゃないかな。

「なら夢の国へ2日行って、また今度にハウ○テン○スへ行かない？君がそれで大丈夫ならね」

『あ、それの方が早くない!?!うんうん、そうしよう！私、今月の□日と□□日に休みとっておくから葬も宜しくね!』

こういう時はけっこう生き生きしてるよなあ…。  
やっぱり、こういう息抜きがあるからこそ、なのかな？

「ん、分かったよ。僕もなるべく仕事が貯まらないように、入りにくいようにしておくね」

『おおーじゃあ、お願いね。私もなるべくそうするように頑張らないとなー。じゃ、また近くになったら電話するね！またね』

「はいはい、分かったよ。んじゃ、またね」

結構楽しみにしてるんだね。僕もそうだから否定できないけど。

ほら、不老不死なこと以外普通の？人間だし。

…：暑さ対策もしないとなあ。

じゃないと僕のことを“外見を気にしてる老いにくい人”と勘違いしてそうな椿に心配されるし。

たぶん。きつと。恐らく。そうなのかもしれないから。

それから数週間後。夏物、冬物を整理してから、新しい服を買いに出かけている僕。

うん、着ないものを捨てるとき。新しいの気になったり、買いたくなったりするよね。あ、ブランド物じゃないよ？

少し靴とかはそういうのが混じったりするけど、基本的に服は一般的な値段のものを買う。

シャツやズボン、ワンピースなどを買うのに高いのはいらねえからね。

「……って誰に説明してるんだか」

つとと。思わず独り言を言っちゃった。

小声だから聞かれてないよね？うん、たぶん平気。

というわけで、買い物買い物つと。

そうこうして数十分、衣類を買った僕は喫茶店に入ったなう。

使い方は間違っていないとか誰にも言っていないんだからセーフセーフ。

なんだか虚しい気もするけど。

買ったアイスコーヒーを苦い思いしながら一飲みして、僕は今度一緒に遊びに行く相手のことを考えていた。

それにしても外は暑い。半袖、ハーフパンツ、半袖ワンピースのど

れを着ていこうか悩むなあ。うーん……。

まあ、その日の前に考えればいいか。今は周りの人と同じ時を過ごせばいいし。

「……やっぱりブラックは早かったかな」と最後に僕は呟いた。

## 8話 不老不死と四ノ宮椿。あと少しの日常

夏もある程度すぎた日。僕は最近買ったばかりの半袖ワンピースを着て、駅の付近で待っている。

犬の像が可愛い。写真撮っておこう。1枚だけ。

パシヤリ

うん、他の人も写ったけど、いいか。

それよりも少しオシャレすぎたような。カジュアル、の加減難しくない…？

「あー、お待たせー！って葬もそんな可愛く着こなせるんだ。あおいちゃんって呼んでも違和感なさそう…」

(違和感ないどころか逆にようやくオシャレしたって感じ。下手すればシンプルすぎてもったいないってほどだし。…ほんと、どう二次元を見ればそんなにも自分の容姿に卑屈になれるんだか)

「まあね。今回はテーマパークに行くし、オシャレしておこうかと思ってる」

忘れないうちにキャリアケース持っておこう。着替えとか入れたし。

確か以前1泊2日の時に持って行ったら悠希から「他の知人女性より軽いんだな、お前。ま、おかげで他の友人2人とも一緒でも困らないわ」とかって言われたっけ。

「なるほど。あ、ちゃんと着替え持ってきたんだ？そりゃあ1泊2日だし、持ってくるのは当たり前前だけだよ」

うん。あの後遅れてラオンで「あ、夢の国は1泊2日するよ！」と来ててなかったら持ってきてなかっただろうね。

あとは椿が3日連続になるよう、休みを取ってなければ余計に。

「んじや、行こー！」



「はいはい……」

そんなに慌てなくてもゆっくり楽しめるのにね。  
そう考えれるのは僕だけなのかな。  
とりあえず、ついて行こう。

電車などでついた先はまずホテルだった。

というかチエツクイン目的なんだ。すぐに出てきたし。

「僕の荷物、重くなかった？」

（いや、少ししか余計なものを入れないのに重いもなにもないからなあ。葵ってば、もうちよつと羽目を外してもいいだろうに。あ、呼び方を変えてみるのもいいのかな？あと気持ち褒めてみたり）

「葵ちゃんのは軽いからね。私のより入ってないって感じだし」

そんな得意げな笑みを浮かべながら言われてもなあ……ってあれ？呼び方違くない？

僕的には気にならないけど、言っておいた方がいいのかな？さっばり分らないね。

「そ、そっか。ならいいけど」

「そー、そー。とりあえず行こ？置くもん置いたし、早く行きたいなーってことでレッツゴー！」

ちよっ！手を引っ張らないで!?

少し痛いよ!?

「早く早くうー!」

やれやれ、と思いつつ僕は椿と一緒に入口の方へ向かった。

にしてもほんと、椿もなかなかいいよね。僕よりも可愛いから気をつけてあげないとなあ。……なんてぼんやり考えた。

夢の国でそんなのないの知ってて考えてるんだけどね！

3日後、僕は自宅の布団にダイブした。痛い。  
畳だったのを忘れてた。

なにせ、初日から朝一で夢の国へ向かったし。色んなところを周りながら、乗ったり食べたり。

二日目も似たりよったりと忙しかったけど、気分転換にもなるし、楽しいしと全然気にしてないんだよね。

「交友なしで不老不死人生とか無理でしょ……いや、病気になるから怪しいけど、『老いない』と『死なない』の二拍子だしなあ……」

鬱になりかねないよなあ……1人だと。

先に行かれるからそれもだろって？

「ペットでも飼うかな……大変になりそうだけど、独り身よりはマシそう。カメとか？」

「いや、あれはあれで面倒くさそうだしなあ」とかと呟きながら僕は三日ぶりに家の風呂に入り、暖まった。

やっぱり家の風呂はいいね。

「そうだ、久しぶりに神社に寄るのも良さそうだね。仕事をやるのも

忘れないようにしつつ…だけど、期限は今回長いから…」

ま、父さんは63と母さんは60で平気だとは思うけど、最近会ってなかったないし、たまにはね。

それにしても一昨日と昨日は大変だった。もうなにを乗ったのか覚えられないほどに。…覚える気がないともいうけどね。

「あ、そうだ。お土産くらい持っていこうかな」なんて弾んだような声で呟きながら。

## 9話 不老不死の両親への挨拶十？・α

……暑さで目が覚めた午前5時。気持ち明るくなってきてるし、そのまま起きるとしようかな。

「…おはよう。一人暮らしだから誰にも返事されないけど」

ペットでも飼うべきのかな、と考えつつ居間の方へ向かった。

軽くパンをトースターで焼き、バターを塗ってから食べる。食べた枚数なんて数えない。

普通聞かないし、聞かれない。どこの吸血鬼だよ。あと巫女服と吸血鬼のやりとりじゃあないんだからさ。

……普通はどれもないか。

ひとまず夢の国で買ったお土産を持つと僕は家を出た。ほら、忘れないうちに渡したいからね。

つと、まだ早いしあともう少し家で時間を潰すとしようかな。向こうも朝早く起きてるとは限らないしね。

午前7時になったことだし、そろそろ行くとするかな。

とは言ってもお隣だから、時間なんてかからなかったけど。数分圏内だし。

ん？平日なのに少しいるんだ。まあ、分社だから普通…なのかな？「やつほー、父さん母さん。僕だよー」と声をかけつつ、中へ。

少し人がいたけど、こっちまで来ればやつぱり関係者とかその辺りの人しかいないから気軽にかけれるんだよね。

と、そうやっていたら「巫女装束を来た人」に呼ばれた白髪混じり

の男性が僕の方へ近づいてきた。

まあ、その人が父親なんだし、呼んでももらえたっばいならとても助かる。

なら呼ばれたじゃないだろと自分で自分につっこんでしまいそうになる。なにせ自分で呼んだわけじゃないし。

「おお、あおいか。久々にこっちへ来るなんてどうしたんだい？」

「ん、久しぶりに親の顔が見たくなってるね」

と、忘れないうちに「これ、夢の国へ遊びに行った時のお土産。お菓子もあるから母さんと食べてね」と言っ手渡しておこう。

「おお、ありがとな。あとでいただくとするよ。…とこころで元気にしていたか？加護があるし、家が隣とはいえ心配で心配だな」

心配なのは分かるけど、加護って本当にさ。『不死鳥』とか『十二の試練をこなした人』とか『蓬莱の薬を飲んだ人』以上に『ギアスか!?でも現実にはそんなはずだが…』って言っていた人のセリフとは思えない。もはやネタ豊富すぎて、僕のことをどう見るのか気になるレベル。さとりが羨ましいね。

「その加護とやらはともかく、僕としては二次元と現実の区別をしてもらいたいと思ってるよ。ああ、そうだ。僕ならとても元気だよ。友人達とよく遊んだりしてるし」

「いや、二次元とかで知ってるからじゃない。お前のそれは加護。譲らないからな？」と先に言ってきた。

違うでしょ。

というか「それに老いにくいし、死にくい。それってなんか長生きできそうでいいじゃないか」ってまで話してくるなんて。

「んで、久しぶりに帰ってきたんだ。少しは話していくだろうか？」

（ふうむ、なにが違うんだろうか。どう見ても加護だろ加護。フェネクスとか朱雀とかそんなじゃないのか？それかなんかそういう加

護。我が娘ながら羨ましいこつた)

まあ、たまにはいいか。

「うん、そうだね。母さんにも顔を出したいし、そうさせてもらおうよ。それで、母さんはどこに?」

「ああ、奥で掃き掃除してるはずだよ。こつちだ」

なるほど、確かに少し奥にいるね。

手前にも巫女装束を来た人がいたし、掃きたい気分にもなったのかな?

そう思いつつ、今度は自分から近寄る。

「おはよう、母さん。久しぶりだね」

あ、手を止めてこつち向いてくれた。

「ん? ああ、おはようあおい。確かに、久しぶりねえ」

(25歳だからなのか若いわねえ。これでもう少し自分に自信があればよいのだけれども。子供の頃にできてしまった二次元の美少女と自身を比べるクセ、どうにかしてあげたいわね)

「ん? 僕の顔をそんなに見て、なにかついてる?」

「あら、そんなに見てたかしら。悪いわねえ。そういえば元気にした?」

「父さんにも言ったけど、僕は元気だよ。内職とはいえ、友人達のおかげで運動不足にならないし」

そこまで動かないけど、それは黙っておく。

ものによっては軽い運動みたいなのするからね。例えばアスレチックとかレーザーアスレチックとかそんなん。

……あれ、最近行つてなくない？

「まあ、確か結構友人がいるんだったもんな。母さんも知ってるだろ？ ネットの友達がたくさんいるって」

母さんが頷いた。やっているゲームをすすめたのは僕だし、ネ友を紹介してるのも僕だから当たり前、か？

いや、たまに紹介されたりしたから案外社交的だよな。

……たまに始めてすぐのゲームで変な動きするのはやめて。ビツクリするんだから、と言いたい。

その後、他愛ない会話とかもしていたら時間が結構たつていて驚いた。11時前だよ？

そんなに話したっけ。

「あ、そろそろ僕、お昼食べに行くからもう行くね」

「ああ、そうかい？ あんま無理するなよ？ あとたまにはこっちへ顔出

してくれ。色々あるとはいえ、心配なんだよ」

「あら、酷いわ。私も心配なのよ？まあ、あおいには不死鳥かなんかの加護があるから大丈夫なのかもしれないけどもね」

うん、不死鳥かなんかの加護とかそういうのないからね？

「うん、ありがと。分かったよ。んじや、また今度ね」

「ああ、気をつけるんだよ。加護か能力だかどっちか忘れたけど、信頼しすぎるのもよくないからな」

「怪我とか、病気にも気をつけるのよ」

加護だけじゃなくて能力って説も出てきたんだ。

……原因不明、としか分からないからなんとも言えないけど、誤解な気がする。主に前者。

まあ、この世に能力なんてあるわけないけどね。現実と二次元は別だから。

そう考えつつ、実家兼神社を離れた僕はなんとなくゲーセンやカードショップの方へ遊びに行くことにした。

本当は他にもやることあるんだけどね。たまには息抜きしたくなるじゃない？

なーんて誰にでもなく言い訳してみたり。

……そういえば、ある場所にペットショップがあるんだっけ。覗きにでも行こうかな？

んじや、目的追加でレッツゴー！



## 10話 秋めく日々と不老不死

あれから何度かペットショップに通ったり、友人達と遊んだり、仕事で徹夜したりと色々していたら秋めいてきた。

芋でも小さめな庭で焼いてしまおうかな。

あ、いや。今は小さな同居人ができたんだっけ。

1年から2年しか生きないけど、お試しならお手頃かな？

「ね、さくら」

と言つて一から部屋などを買ったゴールデンハムスターの方へ振り向いた。

和室のデスクトップパソコンから右へ、PS4などがある場所からは左へ振り向けば見えるんだから楽だよな。

まだ二ヶ月の女の子だから、だいぶ育てられそうかな。

「……って、朝だから出てこないか。僕と違って夜行性だもんね」  
つと、ひとまずやることしておくかな。仕事とかそういうの。

やっておかないと期日に間に合わなくなったりするからなあ。そう考えるとブロガーとかも大変そうだよな。あとYouTube<sup>ユーチューバー</sup>とかも。

仕事とかそういうのをやっていたら、昼前になっていた。ちょうどいいし、外食にしようかな。

作るの面倒だし、ハムスターの餌や水はやったし。んじや、行くか

な。

つて、出てきたらなんか横断歩道を赤信号で歩く子供がいる件について。

いや、普通に考えて危ないでしょ。

つてあれは

「ちよっ……!?!」

“ソレ”が見えてから子供——女の子かな?——に向けて駆け出し、突き飛ばしたのはまるで他人事のように思えた。

ああ、「わっ!?!」なんて驚いたような声を出して尻もちをつく少女。それにしてもさ……点言い訳、考えてなかった……!!

ア、ハイ。ひつどい死体だね。目も当てられないね。ヤバいね。

「えっ?お、お姉さん……大丈夫なの?」

「ん、僕?全然問題ないよ。君こそ大丈夫かい?」

(ど、どう見てもお姉さんの方が大丈夫じゃないんだけど……!?!ううん、むしろ血がたくさん出て死んでる人と同じ姿のお姉さんがいるとか  
どういうこと!?!)

あ、運転手が降りてきた。男性やったんだ。

「え、あ、その。大丈夫ですか?」

「えっ?あ、はい。にしてもごめんなさいね、よく出来た死体を投げてしまつて。ほら、今度のハロウインのためにって血のりとか用意して

たもんですから…」

「そ、それにしてもはやけに人を引いた感覚が「ハロウインのための小道具ですよ？」」

「アツ、ハイ」

「……………」

よし、運転手はまるめこんだ。あ、少女が呆然としてる。

しかもなんか女性っぽいの来た。

「あ、すみませんね。お嬢さんを驚かせてしまって。あれ、ハロウインに使う予定だったよく出来た人形なんで気にしないでください」

「あつ、はい…。いい、行くわよ。もう赤信号とか渡ったりしなくないから…」

「……………」

なんで気まずそうに帰ったんだか。

まあ、よく分からないけどいいか！

周りでもッえ、ハロウインの小道具にしては出来すぎというか凄くない？”みたいな話になりつつあるから結果オーライ。

痛い思いしたけど、誤魔化したことだから全部OK。なにもしなかったことによる後悔もなーし。…………とところで本当にハロウインに使うか悩むな、これ。

臭いとか普通にしそう…。火葬しとこ。

…………あ、どう伝えよう。火葬場の人に慣れてる人がいるといいなあ、なんて考えながら自らの死体を持ち上げて帰ることにした。

数週間後、ある時に見たテレビで、マジックのような出来事！ハロウィン小道具で人助け”みたいなニュースがされてる時は驚いたけど。

またしばらくした時に母親も来て、お礼のあとにやたらと8歳の少女が悟りみたいのをひらいたのはなにかしたの？と聞かれた。いや、してないし。

それを伝えたら何故か諦めたような顔をしていた。

どうしてその顔をされたのか分からないから気になってる。なんでなんだろうね？理不尽だよ。

「なんか葵ちゃんがニュースに出るとか新鮮だね」

「……そりやどうも」

（うん、あからさまに微妙そうな顔。話を聞けば無理もないような：あるような？でも、葵ちゃんって手品出来たんだなー）

それよりも少し疲れたー。精神的にも色々。

なにせ今月末にハロウィンがなかったら、あれは誤魔化せなかった気がするし。キツキツだね。というか、椿さ。焼き芋買った帰りに偶然会うとは思わなかったよ？

「それにしてもあんなの作れたんだねー。でも、捨てちゃったんで

「しよ?」

「ま、まあ…色々と伝手があったというかなんというか。ん?そりやあれ…あんなにクオリティ高かったら本物の死体と間違われて仮装どころじゃないでしょ?だからもったいないけど捨てた」

「そうなんだ」という割には比較的残念そうな顔をする彼女。

実際に本物の死体なんだから火葬しないとヤバいんだって。なんか面倒事になっても嫌だし。

「ところでさ、葵ちゃんは今年のハロウィンも参加するの?」

ん?あれ、だいぶ間に椿に「今年のハロウィンも参加するね」ってラ○ンで送ったはずだけど?

まさか、その前に椿の天然とも受け取れるボケをしたせいで忘れてるとか。

「ハロウィン?ああ、ハローって言いながらお菓子をあげればウィンウィンな関係になれるあれ?」とかよく分からなかったからなあ。

「あー…参加するよ。コスプレ同然だけどね」

「ん、分かったー。んじゃ、楽しもうね!」

そうやって楽しく話せるのはいつまでなのやら、と。

そうやって少し考えてしまう僕もなんだかね。分かってはいるけど、割りきれないし。

別れの方じゃなくて、自身が死んだ時に下手に生き返れないことに。都市伝説にだけはなりたくないよ!?

などに関係ないことを考えながら話していたら、いつの間にかゲームで遊んでいた。

二人プレイ出来るやつだし、椿も楽しんでそうな感じだからいいか。

さて、彼女彼達といつまで遊べるのかな?それだけをどこかで考えつつ、椿と夕食まで楽しんだ。話とか人生ゲームで。

## 11話 不老不死は連れていかれる

木枯らしが吹く頃、なんかネ友が「恋人のため」にとマフラーとか編む人が増えた。自分のために編むことのある僕はある意味羨ましく感じる。

たまに顔を出し、動くゴールデンハムスターの「さくら」ちゃんには？犬や猫じゃないし、サイズ的に作るの難しいので却下。というか床下ヒーターおけるし、その方が楽。我が家にも欲しくなる……つて「それだと床下暖房か」

室内犬、猫をダメにする床とも言われるしね。まるで人間をダメにするソファアームみたいだと思った。

いや、むしろその通りかな？

つと、そうじゃなくて仕事もやっておかないとね。

一応今後の貯金とかないと困るかもしれないし、嗜好品とかその他もろもろが買えなくなるのは困る。なので、無駄遣いではない。脳内議論終了。

…あ、そうだ。仕事でも終わったら遊びにでも行くかな？今回は一人で。

そうして、1人遊びに出るとまだクリスマススイブですならないのに  
気持ち恋人の姿が多く見えた。羨ましいぞ。

「あ、葵ちゃんー！1人でなにしてるのー!？」

…うん、この呼び方。椿だね。

とうか横を見たら、だいぶ離れてるじゃない。

「ちよつと遊びも兼ねて出かけに…ってところかなー」

そのまま返事をする最中もこっちへ来ている彼女。

案外落ち着きがないのかもしれない…??

「んじやき、一緒に行こ?ちよつど私も色々と買いたいところだった  
しー」

そ、それはいいけど、僕の片腕をしっかりと掴んでるのは何故!?

ちよつ、ひっぱらなくてもついていくつてば。つて待つて気持ち強  
くない!?

「わ、分かったからゆつくり行こうよ」

「買いたいのものがあつて先に買われるよりはマシつてことでゴー!

ゴー!」

朝からテンション高いなあ…:…なんて考えながらひっぱられつつ、  
ついていくことに。

なんか椿の横顔が楽しげだからあんまり止められそうにないな。

(久しぶりに2人きりだし、女性同士だから色々とはっちやけちやお  
う。んでもって楽しんじやおう)

最初に連れてこられた場所は衣類の店だった。

えっ？今買ったら邪魔にならないかな。もしかして、まだ後々行く予定あったり？…ロッカー近くにあったかな。

「ねーねー、こういうのいいよね」

そう言つて椿は僕から見て体の前側にかぶせるようにシャツを見せてきた。

淡いピンク色の…柄は少しあるって感じかな？花柄は選ばないんだね。

……いや、よきそうなのがそれだったのかな。

「うん、いいと思うよ。似合ってる」

「えー、他に感想は？なんかこう、可愛いね、とか。というか葵ちゃんもなにか選びなよ。たまにはシンプル以外でさ。せつかく買いにきたんだし、オシヤレもしたら似合うと思うよ？」

(普通にオシヤレすれば葵だつて可愛いだろうにね。そういうオシヤレが嫌いじゃないんだし、オシヤレするの覚えてほしいなーとか考えてるのになかなか難しいんだよなあ。しようと思ってくれないし)

……どうしたんだろ、持ってたシャツをかごにいれながら僕を見るなんて。

「さっ、葵ちゃんにもみつくるろつてあげるね！私が買ったげるからさ！」

「だ、大丈夫だよ？…つて行くの早いよ」

止めようとしたらもう向かい始めていたのでついて行くことに。

その後は買い物して、着替えてから遊びに行くことになった。というがちよつと遊べばお昼って時間なので、少し時間を遊んでつぶし、食へに行くことに。

その後は荷物をロッカーに預けて遊んだり、また買い物したり。

途中着せ替え人形のような扱いをうけたけど、なんだったんだろうか。



別れて帰路に着く今でも分からない。

## 12話 数十年後、病気などにもなる不老不死は

あれから数十年後。僕は25歳の最後の冬の頃を思い出していた。といっても今はもう54歳なんだけどね。

いやあ、最後に集まったのがクリスマスパーティーなのだから、ふざけて楽しんだ以外の記憶を思い出すのが大変だった。

お酒、そんなに飲まなかったはずなのに、おかしいなあ。

まあ、そうやって思い出していたのは今の僕は病み上がりなのにも関わらず、悠希達3人とその他子供たちとで近くの公園へ遊びに行くという事になってから。

なにも悠希からなにか教えてもらった…というより変な知恵をつけてもらった小学生辺りの子供達がやたらと遊ぼうとしてくるせいで思わず思い出さずにはいられなかった。いやだって、死んだら死んで痛いし、遊び盛りの子供達を3人同時はキツイ。

不老不死だからってそんな命懸けの遊びを提案してくるんじゃない。いや。

闇のゲームとかじゃないのに。そもそも死ぬ時の感覚、案外残るもんだよ？

特に2人。僕の子と椿の子が影響を受けまくっていて、大変なんだよ。ほんと。

「ねーねー、おねばあさん」

「お姉さんかどうかわからないんだっいたら普通に僕の名前を呼んだ方が楽だと教えたはずなんだけど…」

「えー、それだどつまらないんだって、お父さんが」

「そうそう、僕もさ、僕の父さん母さんの知り合いの橘悠希って人が面白く呼んだ方が退屈しないって教えてくれたんだぜー？」

なにを教えるんだか…。自分らの子供でしょ？

あと我が子にも変な知識を教えるんじゃない。最近我が家でも驚

くことされるんだから。」

例えば「不老不死の確認です」と朝包丁持ってきたり。それはある意味心臓に悪かった。どんなホラーにも勝てるんじゃないかと思うほどに。

ひ○らしの真似をしてこようとしてきた時はもつと焦ったけどね。処理とかどうするつもりだったんだろうか…。やれやれ。

「ハハハ、葵。楽しそうだな?。」

「楽しくないよ!。」

30代か40代になった悠希が楽しそうに笑いながら話してきた。対岸の火事みたいだと思ってるんだから。ほんと、全く困った人だよ。

でも、退屈するよりはマシ……なのかな? いや、両親が家にいるからそうでもないな。

僕のことを「歳を取らないなんてまるでサーヴァントのようだ」という元気な父さんに、その父さんの手に油性ペンの赤色で令呪もどきを書く元気な母さん。

ある意味1人じゃ見きれないので申し訳ないと思いつつネット友に依頼した。資格もあつて車もあるから大丈夫らしいし、そういうのはしっかり支払っているので最近そこまで苦労しない。

「あつ、そうだ! 篠崎おねばあさん!。」

「違うよ。お母さんは見た目がお姉さんで中身がおばさんなんだから、お父さんがそういうのをサーヴァントや美魔女っていうんだって教えてくれたんだよ」

「え、そうなの!。」

いやいやいや。全然違うし、それ以前にフオローになってないよ、と思つたら悠希が笑った。なるほど。君だったのか。

…40、50代になったその体で僕と競走させてやろうかと思つた僕は悪くないはず。ちよつとした意地悪扱いされるだけのはずだし。

(いやあ、彼女の家族は面白い勘違いみたいなのをしてて退屈しないな。でも、こうやってふざけてた方が楽しいってことぐらい知ってるだろうに。…って、俺も良い歳だからやめようやめようとは思ってたんだけど、やっぱり楽しくてやめられないな！)

ため息しかでないんだけどなあ…。

「全く……。ほら、あつちで椿お姉さんや湊お兄さんが色々準備してくれたし、突撃したら？」

「「はーいー」」

そう返事した3人の子供は公園の反対側にいた2人にかけていった。

…もしかしてさつきまでの流れに混じらない辺り、1人だけ真面目だったのかなあ。

さて、ふざけだしたら未だに手におえない悠希と僕だけになったことだし、普通に話すか。

「全く……。最近もふざけてるけど、肩とか大変じゃなかったのかな？」

「え？さすがに診てもらった。んでもってどうやれば軽減できるか教えてもらったから楽だな」

もしかして四十肩じゃなかったと。

…あれ？じゃあ、ただの肩こり？

「いやあ、そんな呆れたような半目で見なくともお前ならなんとなく分かるべ？とにかく大したもんじゃなかったし、マッサージとかはやっぱ受けると楽だよなって話」

「ああ、そう。それはよかったね」

原因は子供混じりだったか。なら仕方ないね。…もしかして腕にぶらさげたりしてる？

「あ、そうだ。子供達がお前に東方projectかなんかのコスプレをしてほしいってよ。確か同じ不老不死の奴を。そんでその格好で遊んでほしいってさ」

「えっ?……ええー……あの人の?確かに今の僕は病気になる点以外は似てるけどさ、ヴィッグつけるの大変なのに」

(まあ、前は子供相手にヴィッグまでしたコスプレで遊んでたっけか?ただ子供らと遊んでると外れるし、動きにくいと諦めてたんだっただな。俺的にはそりやそうだとしか思わんけど)

うん、やっぱりコスプレで遊ぶのはやめた方がいいよね、と思うようなスカート類を選ぶ僕が悪いんだろうけどね。仕方ないね。

あ、でも今回の子はもしかしたら……

「ま、それはおいおい買えばいいんじゃないか?今はともかくあいつらが安全にふざけるよう近くにいますぞ」

「いや、安全にふざけるとかどんなんだし……って行動早いな!」

そうじゃないだろ、と言う前に悠希は5人の元へ少し駆け足で向かった。

僕はそれを見て少し笑みを浮かべながらあとを追った。

ああ、この後どのようなになるんだろう。

そんな期待を胸に。

if 病気にもなる不老不死（笑）がもしタバコもやっていたら

if 1話 喫煙家の不老不死

僕は病気にもかかる不老不死。それでかつ、自他共に認める愛煙家でもある。

いや、誰に説明してるんだろうなこれ。自分でも分からない。まあいいか。

なんて思いつつ、ちよつとしたDIYで家の小さめな庭に作った喫煙所で僕はよく吸うセブンスターの箱を開け、1つ手に取った。まだ1つしか吸ってないよ、なんて誰に言うわけでもない言い訳を考えながら火をつけて吸い始める。

「……ふう。それにしても僕も病気になりやすくなるとかなんの皮肉なんだろうな」

そう呟くとメールが。なにになに？

“そろそろ健康診断を受ける頃じゃないか？不老不死ちゃん

by あまがみりく天神陸”

この担当医師の言い方よ。僕の名前を知っててわざとこういうんだから意地悪とも思うよね。

ふざけてるから、つてのが真実だけど。でもメールではやめないかい？

まあ、健康診断には行くけど。

そう考えて、僕は吸っていたタバコを消して灰皿に捨てた。もちろん、病院に行く準備をするためつてのものもあるけどね。

やれやれ、不老不死なのに健康診断とは不思議だよね。しかも毎回

タバコをやめるようにとあるし。いいじゃないか、タバコはすっかり喫煙所で吸うし。

さすがにお酒とタバコ両方を同時にやったことはないけど……と、いい加減健康診断の予約なりなんなりしにいかないとかあの担当医からの説教を受。けそうだし、早めに行こう。

「面倒だけどねえ…」

そうぼやきつつ、準備をして比較的近くの病院へと向かった。

とりあえず、何事もなく家についた僕は家の前に来ている2人に思わず笑った。

「いやいや、悠希。知り合い連れてくるのはいいけど、事前に教えてくれないと困るよ」

「いやあ、たまにモ〇ハンで一緒になるし、気づくかなって思ってな」

「それは無理だよ!?!」

「気づくのは無理だな」

(ふ、2人するという必要はないんじゃないか?でも、俺自身ふざけるのが楽しいからやめないが)

とりあえず家にでもあげるか。どうせ僕がよく喫煙する場所には中にはないんだし。

それで、あげたはいいいけどなにをしにきたんだろうか。

「悠希、友人なんか連れてきてどうかしたの？」

「どうもこうも、久しぶりに遊ばないかと。大丈夫だ、つい最近初心者マークのとれた俺が運転するから」

「お前はスピード出しすぎるんだよ。高速道路で110キロ出すバカは普通しないだろ」

それを聞いて逆に不安になった。色々大丈夫？

（ほら、言わんこっちゃやない。悠希の女友達が心配そうな顔をしてるじゃないか。まあ、俺も運転免許があるから交代できるし、危なそうだったら交代するか…）

っと、そういえば自己紹介まだじゃない？

突然来たのにこれだから忘れそうになった。…忘れてた気もするけど。

「そういえばまだ自己紹介してなかったね。僕は篠崎葵だよ。君は？」

「あー、そうだったな。なんかこう、悠希の友人ならではの雰囲気があったからつい忘れてたわ。俺は一ノ瀬湊だ。宜しく」

「うん、宜しくね」と僕も返した。

比較的真面目そうな人だな。悠希の友人はなにかとゲーム関連でおかしなことになってるから、唯一の普通……なのかな？ゲームの腕前を知らないから分からないけど。

というか朝ごはん食べたの？僕は喫煙前に食べたけどさ。

「それで、何か用？あと朝食は？」

「お前は人の母親か。…俺は食べてきたが、湊は？」

「さすがに食べてくるさ。そういう葵さんはどうなんだい？」

え？そりゃあ



「タバコ吸う前に食べたよ。もちろん吸う場所は小さな庭にある未だに試行錯誤中の喫煙所んだけどね」

「1日で下手したら1箱や2箱あけるくせに律儀だよな。というかその喫煙所、試作何個目だよ」

(…うん、俺だけじゃないよな、気になるの。んで、聞かれた瞬間すごく面倒くさそうな顔をしたな。やっぱり結構手間かかってんのかね)

それは…だね。うん、かなり。

数えてないだけでも結構作ったんじゃないかな。最初は怪我もしたし、喫煙所として機能しなかったりと。

その時の怪我は酒のじごうじとく一気飲みとかの影響でないけど、想像以上に大変だった、とだけにしておいてる。誰だ、家に喫煙スペース作ろうとか考えた奴。

…僕か。

「あ、あ…そこまで大変だったんだな。俺もそういうちよつとした物作りとかをできる範囲ですが、あれは…うん。分からなくはないな」

「確かに湊はそういうのも好きみたいだもんな。だから分かるのか」

「まあな」と頷きながら答えるのが聞こえた。

几帳面なのかなあ、と内心遠い目。いや、僕だって少しは真面目だと思っよう？たぶん。

「ま、それはさておき。遊びに来たの？あとアニメの再現とかいい？」

「タバコを吸うシーンの方が少ないか？最初は吸ってないのも知ってるが、あれだとお前死ぬ可能性あるだろ。…あ、お前は平気なんだったな」

(はあ？再現で死ぬようなのあったっけか。一応俺もアニメは見てるんだけどなあ。そもそも葵さんのなになが平気なのやら)

あ…そうか。湊さんは知らないけど、僕と悠希はよく僕の家で酒を飲んで二日酔いになったり、下手すればどちらかが病院へゴーを

している仲だからね。ついでにお互いの家でお泊まりも。

確か、そのいつも通りの飲み合いしている時に勢いあまって、僕が病気になる不老不死”だと口を滑らしたのがきつかけ。それから友人の中で悠希とその友人達だけが知っている。

「ほら、僕って特殊な訓練受けてるから」

「それはねーよ」

(どういう話をしてるんだか。楽しそうに笑いあってるし、気にしてなさそうだから別にいいんだけどさ。……というか特殊な訓練ってなんだよ)

「それよりも遊びに行かないかと誘いに来たんじゃなかったっけか？」

あ、忘れてたと言わんばかりの表情を浮かべた悠希。

えっ？悠希のことだからってつきり遊びに来ただけなのかと……。

「そうだったっけ？」

「ちくわ大明神」

「そうだよ……って葵さんはなに呟いてるの」

「ん？ふざけたただけだよ。よくあるでしょ？」

湊さんから「そんなのよくあってたまるか」とツツコミをもらった。ナイス。

「とりあえずいつもの場所へ遊びに行こうか。またゲーセンとかが多くなりそうだけど」

「いつもの……ってよく行く場所でもあるの？」

あるとしても、出来れば喫煙スペースが近くにあればいいんだけどね。

いや、ないならいいけど。

家に帰れば吸えるし。こだわる必要はない、と心の中でキリツとしてみるけど逆にむなしくなった。やめよう。

(そういやこいつのこと、湊にお酒を飲んだりしたことがあるとしかいってなかったな。あとでタバコもやってること教えとくか。んで、

葵が不老不死つてのは黙ったままの方が面白そうだな。なにせ病氣とかになるし、後々楽しませてもらえそうだ)

「ん? ああ、基本的にゲーセンとかカラオケとかな。スマフォゲームもあるが、あっちは歩きだからなあ」

「カラオケはあんまり行かないだろうに。……今日は平気?」

そう言いつつ半目で悠希の方をチラ見していた湊が、今度は僕の方を向いて聞いてきた。

んー、灰皿洗ったりするのはあとでいいから平気としか。

「そうだね、仕事とかに余裕あるし行くとするよ。ちよつとばかし家にすぎたような気がするからね」

「あれ? 不老不死のお前って内職だったっけか」

確かに体質的な問題で普通の仕事場にはいつづけられないけどさ。

原因不明のやつらしいしねえ。

「……それはいいから」

そう、僕が呆れたような声で返すと悠希はハツとした表情になった。

正直いって、嫌な予感しかしない。

「あ、そうか。お前、吸血鬼だったんだな!」

「誰が石仮面つけたっていった!?!」

ぷつ、という笑いをこらえたような声が聞こえたけど、違うからね!?! 本当だからね!?!

そう思いつつ、湊さんの方を見るも、こうも仲がいい人達の会話を聞いていると面白い。みたいな感じだった。何故だ……!

(やっぱり友人がその友人達とふざけているのを見聞きしていると笑いをこらえるのも大変だね。……おつと、もうこんな時間か)

「楽しそうにしてるとこ悪いけど、そろそろ行かないか? 9時になることだし」

「楽しそうって……はいはい」

「へーい」

湊さんのその一言に僕達は各々の返事を返すと家を出た。もちろん鍵は僕が閉めるから最後に出たのは僕だけだ。

湊さんの車に乗せてもらうと、そのまま目的地へと進み始めた。やれやれ、何事もなければいいんだけど。

i f 2話 この不老不死はもしかしたらへビース  
モーカー

その後、ついてきた場所は僕はたまに来る場所だった。ほら、タバコ買う以外にゲームとかトレーディングカードゲームとかするし、それを買いに来たりしてるからね。

秋○原の方が多いけど、黙っておく。

車での移動中、前に座った悠希から「30歳って不老不死のわりには若いよな」と爆弾投下された。いくら僕でも泣くよ？主に年齢の方で。

……いや、僕が「予防接種とかしてるよ」などのまだそこまで話していないことを言ったおかげでどうにかなったけど。

いや、そんなんで否定される不老不死ってすごいーーーと思ったけどそうだ。不老不死っていわば変化がないんだから病気にも、ましてや予防接種もできるかどうか怪しいんだった。

花粉症にもなりかけたこともあるんだからもう不老不死としては悲惨である。いや、今はその春なだけけどね。

あと年齢はどうにかうやむやにした。まだ教えるにもそこまで仲良くなつたってわけじゃないし。悠希はまあ、友人になってからもう2年だし、別なんだけど。だからって年齢はまだ言うんじゃない。まったく、口の固そうな友人のみって言ったのに。

「なんか車を駐車場に止めてその近くの店まで来たはいいけどさ、なんか葵さんが遠くを見るような目をしてるのはどうしたのかな」

「さあな。さっきの会話以外に心当たりないから知らね」

「それは知ってるというんじゃないかな…」

なにをひそひそと。そこそこの人が見える範囲にいなかったら、おふぎけでアニメの真似事もしたのに。なにを見ているー！とかそんな感じの。ポーズまではさすがに知らない。

「いんや、なんでもないよ。それで、なんだったつけ？」

「これから食べ歩きをしに、だな」

「これからゲーセンを見に行こうかと」

(かぶったな…)

(ああ、かぶったね…)

なにこの2人、顔をあわせたと思ったら頷きあつただけ。友人ならではの意思疎通なのかな。

いや、むしろ今から食べ歩きって入らないんだけど。…：…なにかされる前に

「あー…僕は久しぶりにゲーセン見に行きたいなー？食べ歩きはまた今度かあとでにして、さ」

そう思ってたはいいけど、すごく棒読みになってしまった気がする。

「そ、そうだな。ゲーセンでも見に行こうか」

「んだな。食べ歩きならいつでもできそうだし。なんなら行きながら話でもしないか？な？」

「分かった。別の話題ならしてあげるよ。んじや、僕と湊さんとで先に行くね」

とまでいうと僕の言葉に一瞬固まる湊さんだったが、「あ、ああ…そうだね」とだけ返して僕と一緒にその店とは別にあるゲーセンの入口まで歩き始めた。

悠希もさすがに諦めたのかあとを追うようになってきた。ま、ここまですればなんとなく諦めると分かってきたからしたようなもんだけどね。

というか食べ歩きならよくしてるよね。たまにはゲーセンとか入ろうよ。スマホゲームとかはいれないからね？

その後はメダルゲームやらアーケードゲームやらで遊んだ。合間に僕が喫煙所に寄ったのもあるけど、結構長くいた気がする。

もちろんお昼は食べたさ。

「あ、そうだ。帰りさ、銀行によってもいいかな」

「ん？どうしてだ？」

僕は「いやあ、実はね」と前置きして

「健康診断へ行くし、生活費でもおろそうかと」

と正直に教えた。なぜ悠希は笑うのをこらえるんだろうか。

「ぶっ、お前がか？毎年毎年律儀だなー」

「いやいや、悠希。そこは笑うとこじやないだろ。病院に健康診断へ行くとかめつちや真面目じゃないか。それを笑う必要は……」

いや待てよ、と呟いてそれ以上言わなくなった。どうしたの？湊さん。

（そーいや車の中で不老不死なのどうだのと言つてたけど…健康診断？毎年？本当に不老不死なのかな、葵さんって人は）

悠希と顔をあわせる。というか向こうがあわせてくれたというベきなのかな？

…たださ、今見られても渡せるのはほとんどないと思うよ？

「いや、湊さんがなにを考えてるのかさっぱりだけどさ…僕にも色々あるってことだから気にしないでよ」

（葵の誤魔化し方って下手だったんだな…いや、知らなかったわけでもないんだけどな？なにせこいつ、タバコにハマるわ、お酒は普通にたしなむわ、風邪とか余裕で引くわと誤魔化す必要がなかったみたいだからな）

「そ、そうかい？ま、まあ…そうしておくよ。好奇心は猫をも殺すって  
いうしね」

「葬なら死なんべ。なあ、葬？」

いや、それを僕に振るなし。ワ○ピー○のサ○ジの真似事がしにく  
くなるでしようが。

んで、僕が黙っていると

「死ぬとか死なないとかそういうんじや…ああもういや。んで、  
なんの話しだったっけ？」

あ、ツツコミ放棄してる。

話は…そもそもなんだっけ？この話題。

「……なんだったっけ？」

「さあな、俺も忘れた。んじや、まだ遊ぶとしようか」

「んだねー」

「そうとしようか」

結局また、ゲーセンで遊んだ。

メダルゲームがさつきは当たらなかつたジャックポットに当たっ  
てみたり、リーチしてみたりと時間を大幅に使った。湊さんに言われ  
て見た時間がそろそろ夕飯時つてぐらいには。

「とりあえずなんか食べに行こうか」

「そうだね。僕もいい加減お腹すいたし、一服もつきたいし」

「一服ならだいたいあったろ。何回喫煙室に向かったよ。腹減つたのは  
同意するが」

湊さんにそう誘われたからついそう言ってしまったけどさ、そんな  
に僕って喫煙室に向かったたかな。覚えてないんだけど。

いや確かに数回は行った覚えあるよ？ただそんなに行つてはない  
……はず。

「んじやとりあえず昼食へゴー！」

「いや、その前にメダル預けようぜ。お前の奴なんだし、いないと無理



「なんだからな？」

「あつ、はい」

（ぶつ、葵さんつて悠希といるところなのかな？他の友人より抜けてるとか思ったのは俺だけと思いたい）

急いで悠希と共にメダルを預けると昼食を取りに、湊さんと悠希と僕とで上の階へエレベーターで向かった。

…まだ、日常の範囲だった。

i f 3 話 不老不死との約束の代価はタバコ

昼食を食べたあと、僕達はーといても3人なただけどー悠希の知り合いの釣り船に乗っていた。いや、訳が分からない。教えられずについてきたわけだし。

「んで、なにしにいくの？沖になんて向かって」

「そうだよ。何気に悠希の知り合いが釣りの準備万端だったのが驚きなんだが」

確かに。何を釣るとか話してないわりには漁船で沖まできてるし。なにをするつもりなんだろう。

（あ、まさかあのラ○ンで来た釣りの誘いが来たから行こうぜって……そんなのないよね？）

（……あの子、本当に不老不死なのか？どう見ても普通の人間だろ。まあ、悠希のことだ。俺に直接教えきたのには理由があるんだろ）

「それで結局なにを釣るの？」

僕がそう聞くと悠希だけはさも当たり前のような顔をして

「葵を釣り餌にして、サメを釣るつもりだが？」

といった。

……  
……  
……

はい？今なんて？サメ？サメって言った？

「おいおい、悠希。サメを釣るとなると葵さんが死ぬじゃないか。お前それってなくないか？」

うーん、と腕を組んで悩んでいた僕をおいて聞く湊さん。気にしてくれてるんだね。ありがとう。

でも、僕なら平気なんだよね。

「だったらじよ○○えんでランチメニューね。もちろん君達のおごりで」

「あー、だよな。俺も入るか。まあ、釣り以外にも収入が俺にはあるから俺が少し多く出すとするよ」

(半信半疑とはいえ、サメはサメで食べれるからな。あ、この話は葵と湊にしてなかったわ)

「そーいや葵さ、サメって食べてみないか?」

(……巻き込まれた俺も払うの前提なのな。やれやれ、今日は知り合いもいるとはいえ……悠希がいつもよりアクティブだからまいったもんだな)

「ん? ああ、食べる。興味あるし。それならおごりつてのなしにして、僕も少し払うよ」

「おっし、ならその話で行こうか。悠希、篠崎お嬢さんにあれ渡しといて」

「はいよ」

そう話して僕にナイフを渡してきた。

包丁とは別だよ?

僕が今からそのナイフで足を軽く切ろうとしたら湊さんが止めてきた。

腕をつかんで。…真剣な顔してどうしたの?

「いや、でもやっぱり危ないよ。相手はサメなんだし……」

「大丈夫大丈夫。僕ってば特殊な訓練受けてるからサメとこう、格闘できるんだよ」

(はあ? いくらなんでも無理があるような。それに喫煙家でお酒も飲んでるらしいし。…悠希曰く、飲みすぎてお互い医者から呆れられてる。…ってのもあるからな。まあ、それは関係ないとして。……それを抜きにしても危ないだろ)

ほんと怪訝そうな顔をするね。とりあえず今のうちに切つてしまおう。

……あ、そーうだ。たまには違う方法もしてみようかな。前はよく足に噛みつかせて僕がサメのエラを掴み、釣り上げるってしてたわけだし。

…普段より痛くなりそうだし、あとでタバコも請求しようかな。メンソールのやつで度数の高いやつでも。

と、そうだ。返しておこう。そう思って酸素ボンベなどと交換で悠希の知人男性とナイフを返した。

ニコニコと笑いながら僕は

「ちよつと汚すよー」

といいつつ、酸素ボンベの管を持つ。

(汚す?…ああ、もしかしてそういうことか。ならこっちは針でもたらしとくか)

あ、悠希がやつぱりすぐに気づいた。ニヤツて得意げにしだしたし。

あとでたまにしか吸わないメンソールのタバコ要求するけど、いいよね。いいよ。

よつしや、一方的に許可をもらったとこでやりますか。

(ん?いきなり酸素ボンベの管を片手に葵さんが海に入って…ああ、悠希の知り合いの方が呆れ顔になった。いや、俺は俺でよく分からなくなってきたんだけど。誰か説明して欲しい)

「つてうわああ!?なんか口に入れて少ししたら葵さんがなんか死んだあ!?!」

「うわああ!?タイミングミスって投げ入れられた針のところに生き返っちゃった!?!」

「え、えええ?!」

「ハハハ!なんか面白いことになってるな!」

「やれやれ…:僕にとつては面白くもないんだけどな」

さあ大変。僕が酸素ボンベの管を痛みなどガン無視で肺に入れ、そのままサメの撒き餌に化したタイミングで悠希が悠希の知り合いに見られつつ?一緒にサメを釣るための針を投げ入れていたようで大混乱。主に湊さんが。

僕は単純に失敗したって気分だから入れないでおく。というかサメきたよ？

「おーい、葵ー！頑張ってサメ捕まえてなー！」

「んじや、ウエストポーチの中身投げてくれるー？今日実用できるレベルにしたいいい道具があるからさー！」

「ん？あいよー！」

（つてこれ、ア○スポー○でモ○スターに張り付き攻撃ができるようになったヤツと同じもんじやないか。：なるほど、こいつは色々面白そうだつと）

「おっ、ナイスー！んじや、逝ってくるー」

僕はそう言い残すと顔だけつけようとした。あ、シユノーケルマスク投げられた。

（悠希の女友達は少し抜けてるのか？というかあれは下手にサメを呼びそうでこっちも怖いんだが。大丈夫かね）

「なあなあ、今の葵さんのいつてくるのニユアンス、おかしくなかったか？」

「気のせいだろう。な、悠希」

「そういうことにしておくよ。とりあえずヒットするまで待つとしようぜ」

どうしたものかなあ：なんて考えていたらサメが見えてきた。なんか大きいような？

よし、嫌がらせに1回漁船に当てよう。そうしよう。

頭に無理やり張り付き、強引に漁船へと当てつける。水中にいるけど、たぶん彼らは慌てふためいてる。というかサメが僕に狙いを定めてきた。こりやヤバいかも。

「うわあっ!?!ちよっ、葵さん!?!」

「やめろナイスー！」

「おいおい、そうじゃないだろ悠希?!」

船の上はどうなってることやら。

あとでタバコ吸いながらシラでも切ろう。バレてるの前提で。

しばらくした後、まーた死んだ僕は今度こそ “なんにも無い” 漁船の上で蘇った。つてもう港についてるんだ。

(あいつ、サメを引き上げるの大変そうだなー)

「え、あー! 葵さん!?! なんかこう、色々大丈夫だった?」

そ、そんなに焦らなくても。相手はサメなわけだし、不老不死と確認のために2回か3回崖の上から突き落とされるよりはマシだと思っうよ?」

いや…痛み的には突き落としだね、うん。

「あの程度の痛みだったら我慢ぐらいできるからねえ。あ、悠希。あとでタバコ1箱おごりね。ついでにメンソールで宜しく」

「ええー……。ま、じよ〇〇えんのおごりはここにいる4人全員で分割になってるからいいわけだし、別にいいか。今回はマルボロがいいのか? それともセッター?」

(え、そんな冷静に会話するもんなの? 俺がおかしいだけ? …… つてあれ、あのお兄さんも遠い目をしている。つてことはあの悠希の友人も似たような考えである、と? …… むしろそうあってほしい)

「いやあ、今回もお任せするよ。たまに面白いのがあるから楽しみだし。それに僕はお願いする立場だからね」

「あいよー」

「お前達は自由だな……」

「いやあ、褒めなくても」

「褒めてねーよ!?!」

おお、さすが仲良しなだけある。

ツツコミにキレがいい。

「いや、あのな…お前ら、サメを食べないのか?」

「食べるー」

「え、食べれるんだ……というかさばけるの?」

うーん、どうなんだろ。

「葵さん、だったか? 考えなくてもさばけるぞ。俺と悠希とで手本な」

「えっ、俺も!?! えー」

あ、悠希が面倒くさがってる。

「えー、じゃない。というか言い出しっぺはお前なんだから責任もてよ」

と言われたかと思うと悠希が連れていかれた。

「……俺達も行くこうか、葵さん」

「そ、そうだね。そうしようか、湊さん」

お互いの顔を見合わせ、頷きあってあとを追うことに。

サメをさばいたり、食べたりしている時に話し合ったけど、じよ○

○えんは今度全員の都合のいい時に行く話でまとまった。

うーん、やっぱりサメは面倒だな、と感じた日だった。

if 4話 さすがに不老不死は考える

サメ食べたり、加工したり、焼肉したりと色々あった。僕満足。

……さて、今のはさすがに語彙力を下げすぎたね。でもなんかあそこまでやっておいてなんだけど、なんかこう複雑だね。サメに関して

は。帰る時湊さんとかが気まずそうな顔してたし。今度埋め合わせでなにかしてあげようかな、とはなんとなくに思った。

にしてもあの美味しい焼肉。さすが高いだけある。やっぱりじよ〇〇えんは贅沢だった。

え？死んだのによく肉を食べれるなって？ほら、僕自身が死ぬ事には慣れてるから。あと死体もその流れで見慣れた。

まあ、いつもの倍払う金額が少なめなんだけどね。ほら、4人で払った上に僕の分は0.5人分だからね。おごられてるのと大差ないんじゃない？

4人で割り勘するときよりも面倒だった。主に計算が。

それはいいとして、あれからしばらく。今日はやることが少なくて暇だな。

アニメでもツ〇ヤから借りてこようかなあ……。

そうとなればさっそく〇タヤ行くか。

そんなに遠くないし、便利だね。

ーーツタ〇に入っつていい新作か旧作ないかな、と探していたらかつての同級生がいた。

僕と違い、だいぶ大人びた雰囲気をしているその女性は以前していたポニーテールからショートボブになっている四ノ宮椿がいた。

“というかそれを抜いても色々大人になったなあ、と。やっぱり三十路は違うね”って言ったら本人が傷つきそうなのでやめる。



僕も女性だけど、そういう手の話は怒らせる可能性があるから怖いもんだ。

「……ってあれ？おおい？あおいちゃん？」

あ、気づかれた。というか気づかれても不思議じゃないんだけどね。

椿の方を僕は向いてるし、相手も偶然こっち向いたし。その相手は僕の顔覚えてるっぽいし。いや、覚えてるのか。

(あ、あおいが急に固まった。もしかして見た目があまり変わらないことを気にしてる？というかももう美魔女でいいんじゃないかな。美魔女ってなんのことかよく分からないけど)

「久しぶり、あおいちゃん。高校卒業以来会ってなかったけど、元気にしてた？」

「あ、ああ…久しぶり。そうだね、何事もなく元気にやってるよ。椿こそ、どうなの？」

「そう？よかった。私も元気にしたよ。結婚したり、子育てしたりと色々あったけどね。あ、今は保育園に預けたりして働いててね。忙しいんだ」

(でも久しぶりに会うなんて驚きだなあ。というかあんまり姿が変わってないのも驚き。老いにくいって噂はあながち嘘じゃないのかも？)

「だいぶ忙しいみたいだね、椿は。僕のところはまだ独り身だからさ、仕事と趣味を両立できてるんだよ」

「まあね。でも、あおいちゃんも友人は大切に……ってあおいちゃんはむしろ普通に仲良くしてるから平気かな」

あれを仲良くしている、とっていいのかどうなのやら。

不老不死というのを確認するために塩酸プール、不老不死だから『貴方が好きだったの』みたいなことを言いつつ崖から突き落とし、こそドロではない本当の強盗にやられるとか。

最初の熱中症以外は、特に塩酸プールと突き落としては明らかにひどいと思うんだ。

まあ、それと僕が不老不死なんて教えても普通は「え？あなたは病気になるし、この前だって無理がたたって風邪をひいたんじゃないですか。自宅で働いてるからって気をつけないとダメですよ？」などと言われる始末だから信じないだろうな。

あと冗談扱いを受けるだろうね、しようがないね。話が話だし。

「ぼちぼち良くしてるよ。なにせ色々とふざけたりしてるからね。もちろん、僕達以外に迷惑かけてる人はほぼほぼいないよ」  
「悠希の知人とかを除くけどね」とも付け加える。

事情を知っている医師の天神陸曰く、「僕の場合は不老不死寄りではないけど、前みたくうまくいかないんだよなあ……と」。

特に目の前にいる幼なじみの椿みたいな事情を知らない人の前じゃね。

え？悠希の知人である漁船の人はって？それに湊さんはって？

うん、忘れてた。まあ、いずれなにかしらでフォローするのを忘れないでおこう。

「ん、ならよかった。あおいちゃんも病気とかに気をつけてね？んじゃ、私はそろそろ行くから」

「椿こそ気をつけてね。うん、分かった。また今度」

……なんか、前より明るくなったなあ。

僕もなにかしらで異性と付き合えば分かるのかな？

幼少期の不完全な不老不死だった頃に戻れないのかなー…いや、あれはほぼ不死身なだけな気も…。

「な、なにも考えなかったことにしよう。うん、それがいい」

なんて呟いて僕は改めて目当てのアニメなどを探しに戻った。

○タヤから出てきた頃には5つほど、アニメをレンタルしていた。  
ガ○ダムは前に教えてもらったものを二種類ほど。残りはまた見  
たくなったアニメが三種類。

うーん、でも今でこそアニメやゲーム、小説とかにハマったりして  
楽しんでるけど、前はそうじゃなかったからなあ。

なにせ小学生の頃に不完全な不老不死……もう不老不死もどきで  
いいか。

その不老不死もどきになって以降……というか、中学生の頃が一番荒  
れに荒れたからなあ。何度自殺したことやら。

もちろん死ねなかったけど。不老不死もどきだったし。今は完全  
な不老不死だし、そもそもやろうとは思わないけどね。

「それを伝えたら、試しにやらせてって悠希に言われたから許したん  
だっけ。……某アニメの死に戻りとは言わないけど、これって現代に  
いる？ いらんよね、うん」

とガン○ム種<sup>シード</sup>を見ながら呟いたけど、前に見たHDリマスターと  
は確かにBGMが違うなあと感じた。

そうやって、○ンダム種シードからガ○ダム種シード運命命や死死に戻りする少年の色んな意味での成長する物語の15話とか主人公が苦労人なアニメとか。あと一つ？今度にしようと思った。それだけかな。

「ん、この時にラ○ンとか珍しーねー」

内容は…△月□日ってヒマ？”か。

送り主は…うん？グループになってる。いつの間に。

”俺はヒマだよ。…って葵さんも入ってるの？”

”…入ってるね、完全に”とだけ返した。

あ、”これの方が連絡取り合うの楽だったからな。勝手に入れた”と返してきたのは悠希。それには僕も納得。

”っていうカラ○ンしてたんだ、湊さん。お互い聞いてないから知らないのも当たり前なんだけどね？”

”とりあえず僕も暇だよ。もし悠希もヒマなら遊びに行かない？

あ、次の日休みかどうかも教えてくれると考えやすいから出来れば教えてね”

”あー、一応ヒマだ。ついでに普通に休みだな。……もしかして、なにかするの？”

”同じく。と、いうか葵さんが考えるのか。悠希と行くよりは楽しくなりそうだな”

”た、確かに行き当たりばったりだけどき!?普通に楽しいだろ?!”

あー、はいはい。仲良いね。

”というか、それを見ていたらタバコをまだ吸ってないことを思い出した。そろそろ一服しよかな。……”はいはい、仲良いね。んで、平気そうなのかい？なら僕が今回君達を普通に楽しませることを考えておくよ”と。

あ、他にも自分のためにちよいとなんか作っておこう。

「こ、個人用なら平気なはず」

たぶん。おそらく。きつと。

え、なにかって？

ーお酒というか梅酒？かタバコ。

と、そうだ。たまに見ておこう。頃合い見て混ぜれば彼らにとってもちょうどいいかな。

まあ、精神的ケアが素人にどこまで出来るかって話だけど。どうにかするかな。

悠希の知人よりも湊さん……彼が一番僕の死で傷受けてそうだからね。頑張らなきや。

## if5話 不老不死の誠意の表し方

それから梅雨が過ぎて夏になったある日。というか約束の日になったので、駅近くの集合場所に思わず早く来てしまった。しかも10分ほど。タバコ2本か3本は吸える気がする。たまにライターじゃなくて、自身の手から火が出たらいいのになーという理想を見る。……出ないけど。

とりあえず、近くに吸えそうな場所は……

「つてないんかいー」

あ、比較的大きな声だったせいかわりの人の視線ががが。恥ずかしい。いきなり叫ぶ変な人じゃないか、これでは。

「おー、葵さんは少し早めの到着なんだね」

「あ、湊さん……。おはよう」

(俺も人の事を言えないとはいえ、この人も10分早く来たんだ。これを「少し早め」といえないさそうだけど、細かいことは気にしない。というかこの人は準備が早いタイプなのか。ん？どうして気まずそうにしているんだろう。なにかあったのかな)

ふうむ、この人も早い人なのか。なんならこの際、少し話でもしてみる？

タバコ吸えないのもあるし、そこら辺で適当に吸う訳にもいかないし。

もちろん、周りにそこそこの人通りがいるからしないってわけじゃないよ？うん。

「ところで湊さん。あの後……お肉とか、平気だった？悠希はある程度耐性あったとはいえ、君ともう1人はないっての忘れてふざけちゃったからさ……」

(ああ……気にしてくれるんだね。確かにあのあと俺、肉系を食べる

のにためらいがあつたし、魚肉にすらそれが起こりそうだったけど。どう話したもんかなあ。素直に話す？」

あー、もしかしなくても話しにくいやつだね。

やっぱりアナザーとかそういう辺りみたいな感じだったろうし。ふむ、気づかないでやるのはアレだな。

悠希じゃないんだし、さすがに気にしよう。

「いや、話しにくいならいいよ。ともあれ悪かったね。今度、君と悠希の知り合いに詫びの品とお金を送るとするよ」

「い、いやっ!?さすがにお金まではいらないよ!」

「んいや、そうはいかないよ。僕の思慮不足だったし、精神的苦痛が伴ったと思う。悠希や悠希の知り合いのように耐性がある人ばかりじゃないのを失念していた僕なりの謝罪だと思つて受け取つてよ。ーあ、あの釣り船のお兄さんにもちやんと送つてるよ。後日来るだろうお詫びの品も含めてね」

ふう。ここまで言つてようやく受けとつてくれたか。

僕は当たり前だけど、悠希はそもそも教えてある上に見たことあるし、悠希の知り合いには何故か「特殊な訓練」で通じるしとよく分からない人が多かったからすっかり忘れてたんだよね。ほんとに。

五百万円渡した上に国産の黒毛和牛とこれまた国産の高い卵を送つたんだ。これで和らげるといいんだけどなあ。

ほら、人間つてなにかを楽しむか美味しいものを食べるかとか色々な方法で気持ちをはたてなおすでしょ？

それによく言葉だけじゃダメだつていうし、僕なら多少はどうかかなる。

でも、相手は違うから言葉とそれを出す。うん、我ながら保身的な気がする。

はあ……とりあえず、貯金のし直しだね。それになるべく病気になるようにしないと。

(し、渋々受けとったはいけどさ、これ……なんかやけに分厚いような。いや、あまり本人の前で気にするもんじゃないね。かばんにしまっておいて、帰宅したら確認しよう。それよりも気になることが一つあるんだった)

「そうだ、俺の好奇心で悪いんだけどさ。葵さんってどれだけ吸ってるの?」

あー、なんだ。それか。

「別に構わないよ。それなら。……んー、そうだね。少なくとも1箱、多くて2箱か2箱半とかじゃないかな。吸いたい気分の時は3箱いくけどね」

(え、えええ……喫煙所をよく探す人だとは思ってたけど、それなりの喫煙家だった……。周りを気にしてくれてるだけ、良い人なのは分かるけどさ。………なんか色々とズレてる。っと、悠希が駅から出てきたのが見えてきたな)

「おー！お前ら早いなー?」と言いなから来る人が。

その大声のおかげで相手が悪友こと橘悠希だって分かった。この辺りが集合場所にも選ばれるようなところじゃなかったら余計に目立ってたよね?

「うーん、一応俺も5分だか3分前にはつくようにしたんだぞ?なのにもうついてるとか驚きしかないんだが」

いやまあ、僕は誘った本人だし。

そうでなくても遅れるのは申し訳ないしね。

「まあ、葵はそういうもんだしな。湊はわからんけど」

「お前、俺のことは分かるんじゃないのか?からかうのはほどほどにしてくれー!」

(たまにはいいじゃないか。ま、俺のいう「たまには」は湊にとって高頻度なんだけどな!)



んで、とりあえず連れて行こうかな。

……ここまでに運転免許証をとる必要性が出るとは思わなかったけど、約束の日までに徹夜してでも取ったから大丈夫だね。

いやあ、徹夜してもリセットできるのはいいいねえ。僕限定だけど。

「んん。とにかく、駐車場行くよ」

「えっ？お前いつ取ったよ」

「免許証とったんだ、葵さん……」

各々の反応がこれまた分かりやすい……つと悠希は気づいたのかハツとした表情になった。彼は僕のこと、知ってるもんね。

なにせ実証済みだし。

「この前にね。だから初心者マークついてたりするけど、我慢してね？」

「いや、さすがにお前は安全運転するだろ。なにせ平気なのはお前だけだし。特殊な訓練ところじゃねーぞ」

(特殊な訓練もなにもない気がするよ……!?と、いうかなんで悠希が葵さんの事情を知ってるの？不思議だよ?!ってああ、悠希と葵さん、普通に行っちゃうし……!)

「おーい、湊。置いていかれるぞー」

「ちよっ、待ってくれよー!葵さん達ー!」

あ、後ろから少しかけ足でついてきた。とりあえず、近くの駐車場までつと。

車に乗った僕は後部座席に座った2人をバックミラーで確認してから車を走らせた。

i f 6 話 愛煙家の不老不死が考えた友人達の気分  
転換法

車をしばらく走らせ、目的地の付近にある駐車場に停めた。

「安定した走りだよな。最近取ったとは思えないんだが。数ヶ月とかで取れるもんなのか？」

「葵ならいけんじゃね？ほら、特殊な訓練受けてるし」

（いや、だから特殊な訓練ってなんだよってツツコミをしたいんだが。ほんと、なにをしたらそうなるんだか…）

うん、仲良いなあ……。

にしても湊さんはなにに悩んでいるのかな？不思議。

ま、何はともあれ無事に着いたんだからよしとしようかな。

「んんっ。悠希、湊さん、僕が連れてきたい目的地はこの近くなんだ。5分程度歩けそう？」

「別にそれくらい、歩いたに入らないだろ？」

（う、うーん：確かにそうなのかもしれないけどさ、どこに連れてきてもらったのか俺的にはめっちゃ気になるんだけどなあ。まだ聞かないけど。そういうのが楽しみだしな）

あ、そういえば3D酔いは大丈夫なのかな。これから行くのはVRが多いし。

（にしてもやっぱりあちーな。移動先が涼しい場所だといいいんだが）

「なあ、ちなみに建物の中だったりするのかな？」

「え？教えたらずまらんでしょ？それに今回は僕も楽しむつもりでお

金持ってきたんだよ。タバコも置いてきたほどなんだよ?」

なにせ少し払えば色々楽しめる屋内アトラクションなどがあるんだよ?」

UFOキャッチャーだってそう。

これはもう喫煙所が近くにあつたって楽しむしかないだろう!ガム持ってきたけど、それは秘密。

「変なところじゃないことを祈っとくよ」

「……いや、葵さんに限ってそれはないだろう。悠希の悪友にしては常識人っぽいし」

なんだそのイメージ。

(あれ、俺の悪友ってそんな変なイメージだったか? 否定はしないが、そこまで常識外れはいないはずだぞ?)

(悠希の友人らの中で悪友は基本的にふざける時がすっごいからなあ……。それに反して悪友と称されるこの葵さんはそうでもなさそうに見えるから不思議だよね)

よく分からないなあ、とひとまず首をかしげたけど、気にしないことにした。知ったところで別になんだって話だから。

「とりあえず、こつちだよ」

「あいよ」

「分かった」

んじや、レッツゴー。

予算もそこそこ多めだからやれるもんやれるはず。たぶん。

ある程度歩いて中へ入ると目的地の名前が見えた。

「なあ、まさか連れてきたい場所って…」

「…そのまさかだろうね」

「うん、ジョ○ポ○スだよ。そこの方が楽しめて色々忘れられるっかなー…なんて考えなんだけど、無理かい？」

ホラーとかあるしね。それ以外もあるけど。

あとやつぱりUFOキャッチャーとか。

全員分を払い、悠希と湊さんにチケットを渡した。

一応アトラクション付きでね。

「おお、あんがとな。そういうやお前、仕事は別としてもさ、ゲームん時あまり食事とってないみたいだけど、ちゃんと取れよ？」

(いやいやいや、葵さんがそうなんだとしても、悠希だってゲームの時あまり食べてないだろ。『時間が惜しい』なんて言う時はインスタントですませるくせによくいうよ)

「それを言ったら悠希。お前もだからな？」

なんか『ギクツ』っていう擬音が似合いそうなほど凶星って顔をしてるね、彼。湊さん、聞いたことか見たことでもあるのかな。

「そ、それは別だろう!?!一応俺はインスタントやおにぎりにサンドイッチとか食べてはいるんだから、ゲームにのめり込んでる時に飲食をほとんどしない葵よりはマシだと思っぜ!?!」

(そういう問題じゃないだろう…。悠希はまだしも、彼女のことなんて俺はまだほとんど知らないんだぞ?)

「まっ、まあ…この話はもう不毛だからやめようか。とりあえず中へ

入ろうよ」

「そ、そうだな」

なんか呆れられてるような気がする…。

「……はいはい、そうだな」

まあ、その後普通に皆で楽しんだんだけどね。

意外と湊さんにもエイム力があって驚いた。曰く「悠希に鍛えられた結果」とのこと。

……あのほとんどゲームに時間を費やすっていう練習をしたのか。学生の頃にしか出来なそうな芸当だよなあ。

え？僕？ほら、死ねばリセットだから。そのうち慣れるって。

例えば空腹とかそういういった感情に、ね。あと自らの死体とかよく見たし、しょうがないね。

ひとしきり頼んしだ頃には夕方になっていた。時間が経つのはやいね。

(むう、ホラーに連れていかれた時はどうしたものかと思ったよ。葵さんや悠希は平気そうにしてるし、悠希は苦手だったんじゃないのか……！俺が怖がってたから平気ってか!?!ぐぬう……)

「楽しかったな、けっこう」

「俺はホラーアトラクションに乗せられた時は大変だったよ」

ま、まさかあそこまで苦手だとは知らなかったからなあ……。乗るまで怖いかどうかなんて分からない！とか言ってたし、てつきり平気な

のかと思つてた。

ううむ、苦手ならそれらしいこと言つてくりや乗らせんかったのに。

「まあ、次からは言つてね。湊さんだけ置いてく、というのでも酷いかもしれないけど、楽しめないんじゃないからね。あ、なんなら最初に僕が見てこようか」

「……ある意味凄いな。男前すぎない?」

(いや、こいつの慣れはおかしすぎるから別に俺やお前が普通なんだった。俺だつて苦手なのを湊は知つてるはずだろ?)

んー、そうでもないと思うけど。

それにさ、出てくるのは機械か生身の人間だよ?何を驚く必要があるのやら。

一番怖かつたのは死んでも死んでも生き返る僕だつての。ゾンビかなにかか。……訂正。記憶とかもろもろ引き継ぎだからコンテニューできるプレイヤーでいいや。

「そんなことないよ。ほら、雰囲気分かれば入りやすいでしょ?」

「……た、確かに……」

あ、うなりながらだけど納得してくれた。僕にも丸めこみができ「先に注意しておくよ、彼女……いや、こいつのホラーへの耐性はハンパないからな。1人で入れても真顔で出てくるレベルだから」

「うわ、なにそれスゴイ」

(うん、想像してたが、棒読みになつてな。そりゃそこまでのホラー耐性持ちつて早々近くにいないし。今の湊の気持ち分かる気がするよ、ほんと)

「ホラー耐性ハンパないって言うけど、そこまでないからね?ただそこから辺のホラー程度なら一服つけるほどに平気つてだけで」

「それを世間一般ではホラー耐性のすごい人つていうんだよ、葵さん

…」

「葬の場合、無自覚だからしよーがないな」

い、一体これのどこが無自覚なんだろう。これが全く分からない。「…そうやって悩む姿を見ると本当に無自覚なのかな、って思えてくるね。本人にとつてそうだとかそうじゃないとか関係なく」

「はいはい。…：…ほら、車乗るよ?」

「へーい」

「分かった」

という流れでそれぞれの家に送り届けた僕は家に帰った。

次の日、ラ○ンで「え、あの札束なに!?」なんてきてたけど、そんなに驚くかな?

うーん、あれはお詫びなわけだし、普通に受け取ってくれるようにとお願いした。

…：小さな庭で喫煙中にまた来た。受け取ってつてば。

“そういうのは受け取るんだよ。それでも君にとつて申し訳ないって思うんなら宝くじに当たったとでも思つてよ”

“う、うーん…：…わ、分かったよ。受け取る…：”と来てから返事が来なくなった。

謝罪の気持ちなんだから、そういうのなしで受け取ってほしかったけど…：真面目なのかな?彼。

なんて考えながら僕は2本目のタバコに火をつけた。

if7話 秋十芋Ⅱがしたい愛煙家の不老不死

秋が近づいてきたからって小さめな庭で焼き芋を作ろうとしていたら、女性の姿が見えた。

という少し年老いたその女性って……か、母さん!?

「あらあ?今日は掃除も終わったから暇だし、なんとなく散歩しようとしたらあおいと会うなんて。珍しいこともあるものねえ」

珍しすぎるわ。それこそビックリするほどに。

「それで、落ち葉を集めてるってことは焼き芋でも作るのね?なら、つい先日買ったこの安納芋を使うといいわ」

と言いつつ、母さんがうつすらと紫色の少し太くて長いものが入ってる分かるビニール袋を差し出してきた。

「あ、ありがとう……」

受け取れ、と言わんばかりの渡し方について受け取るとニッコリ笑う母さん。

お、同じ女性なのに母親と来るところも圧力が違うのか……。なにが違うんだろうな。

まあ、いいか。とにかくありがたく焼かせてもらおう。それがいい。

さて、そうとなればアルミホイルでつつみに行こーつと♪一服なんて後回しにしても焼き上がるのを待たなきゃな。

あ、ついでに間違えて自分も焼かないように気をつけないとね。前科持ちで、看護師の紫苑しおんに注意されてるから。

「そりゃあ、僕だって眠かったんだからしょうがないさ。それに焚き火が暖かそうな布団みたいなものに見えるのは自然現象だろうに。ケチだよなあ」

とか呟きながら僕はもらったばかりの芋を手に、せかせかと焼き芋



の準備をするのだった。

パチパチ

心地よい焚き火の音をバックに……待つのが長く感じるから早く焼けないかな。

いや、確かにさ。早く焼く方法なんて他にあるだろうけどね？ やつぱりたまになら落ち葉で焼いて食べたるなるのも分かるよね？ ね？

「……お前ん家から良い匂いがすると思ったら焼き芋でも作ってるのか？」

振り向かなくても分かる、悪友の声。

僕の家からさほど遠くないとはいえ、来たのはコンビニでもよろうとしたのか。

「なんだ、悠希か」

「え？ 悠希違いだろ？」

「どこからどう見ても橘悠希でしょ。人違いみたいに言うんじゃないよ」

それを聞いてなのか、笑い声がする。

試しに振り返ったら少し日焼けした、黒い短髪の青年。というかあくゆう悠希。

秋だからかフード付きの長袖を着ている。チラツと見える半袖はキャラシャツか？ ……まあ、長袖でほぼ見えないからいいとして。

「え？ その方が面白いだろ？ つてなわけでふざけた。因みに焼き芋っ

て半分貰ってもいいか？」

(案外からかいがあるしな。やっぱりボケるにはツツコミがいなきやな。友人らにはツツコミがほとんどいないし、苦勞してるだろうがな)

「え、ええー……確かにそうだけど、君の友人には君みたい人が多いじゃないか。むしろツツコミが少なすぎて追いつかないよ。それこそ一服しにくいほどに」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてないよ!？」と大きな声で言ってから僕はため息をつく。

刹那主義というわけじゃないし、そこまで考える必要はなさそう……というかするの面倒だし。

つと、そろそろ焼き上がるかなー。

「へえ、火だけ消すって葵もある程度焼いたら余熱で残りに火を通すタイプなんだな」

「あー……そうか。悠希もたまに食べるんだったね。今回とかは別だよ。少し良さそうなのを選んで贅沢に焼くだけだし。いつもは買ってるからなんとも」

(ああ、なるほど。普段は買うタイプか。あっちもあっちでたまーに美味しいのがあるし、楽だからいいよな)

ん?…そういえば珍しく悠希が肩下げカバン持ってるな。

どこかへ遊びに行く予定だったとか?

「んじゃあ、待ってる間遊ばね?」

と言って小さめな庭から入れる居間の方を指さす。

「…スマフォとかのゲームじゃダメ?」

「ん?別に構わないぞ。ちやうど数十分ほどは時間をつぶせるようなものがないだろうし」

その後20分近くはスマフォゲームとかをしてたんだけどさ。あれ？

僕、一服するの忘れてない？

……ま、いつか！

その後、悠希と一緒に焼き芋を食べてから湊さんと遊○王をしていて今日暇な人を1人呼んで遊んだ。

後半無双してる奴がいたせいで、一服するひまもなかった。というか違うゲームもしたから結局は楽しかった。

ふうむ、また今度なにかしらでゲームとか仕入れておくか。

冬はとある場所にも行くし、資金調達はしておかないとね。

よし、色々とやらかすぞー。

if 8話 不老不死としての日常は

7 徹とかやったり、いつも以上の仕事の依頼を受けたおかげでだいぶたまった。

家賃はそもそもないとして、払うもの払ってもかなりの額が手元に残る。

理由は簡単。質素すぎる生活をしたから。死ねばリセットなんだから楽だったよ。

…なんだけど、最近妙な感じがしてる。どうしたんだか。

「ま、僕の思い違いかな?」

「さあな、俺には分からんぞ。…というかそれって分かるものなのか?」

ん?あれ?返事がある………あ、悠希か。

「おーい、忘れるには早くないか?31歳。もうすぐで冬眠でもするの?」

「冬眠なんてしないよ!」

(うーん、お泊まりすること増えるってこと言ったが、この感じだともう忘れてそうだな。寝ぼけてたときに教えたのがあだとなったか? まあ、それはそれで仕方ない……ん?こいつ、いつもなら寝ぼけてる最中に言ったことを忘れたことなんてあまりなかったはずだが)

にしてもなんで悠希がいるんだっけ?

朝方に話をしたような気もするけど、すつごく眠かった以外覚えてないや。

まあ、僕が家にあげたぐらいは覚えてるんだし、友人関係なんだから危険ではないでしょ。

「んでさ、今日なにするか覚えてるか?朝、言った内容のついでに教えておいたはずだが」

「え？なにそれ、初耳だよ」

「えっ？」

僕もそれに対し、「えっ？」としか出ない。あれれー？おつかしいぞー？

……あ、今の恥ずかしいかも。

ともかく、なんの話だったっけ？

「ねえねえ、なんの話だったっけ？覚えてないんだけど」

（わりとマジで覚えてないとか不老不死のこいつにしては珍しいな。記憶力云々はともかく、これじゃあまるで普通の人間だな）

「とりあえずな、今日と明日俺がいるってのと、○戯王やらモ○ハンやらやろうぜって話だ。ガンプラとかはやりたくなったらって感じだな。んで、料理は少し俺もやらさせてもらうとか話したはずだが？」  
「いや、それ長いわ。いつもそれを寝起きで聞いて覚えてたとか色々  
と僕おかしいね」

「自分で言うのかよ」

「そうだよ、言うよ。」

なんて考えながら僕は未だ笑う悠希を見る。……でも確かに我ながらおかしいことになってるねえ。

もしかして皆と一緒に歳をとるとか？まっさかー。

そんなの天地がひっくり返ってもないだろうね。……とは思いたいんだけど。なんかさそうとは言っていてられない気がする。特に自作のお酒飲んでから。

自作のお酒、と言っても梅酒だから作ったとは言いきれないんだけどね。

「んん、とにかくそういう話だったんだよね？」

「そうだな。まあ、今うだうだ話してもなにもないしな。やろうぜ」

「はいはい……」

と言って立つて準備を始めたのはいいけど、モン○ンってPSPかPS4なのか聞きそびれてしまった。

別にあとでもいいか。

そのあと、夕方まで決闘したり、人間やめたハンターという名のプレイヤーとして一狩りしたりと楽しく過ごした。途中VRの存在がバテて独占されたりもした。

むう、僕の楽しみなんだぞ？それ。

「とかいつまでやってるつもりだい？…いやまあ、譜面覚えられるから別に困らないんだけどさ」

「なら別にいいだろう？っていうかこれ以外にもあるのか？」

そのゴーグルで見えないだろうけど、頷いておく。「あるよ」とだけ。

「へえ、マジか。明日か今度にでもやらせてくれないか？今度俺もゲームとか持ってくるからさ」

「んじや、PSPでオススメの宜しくね。君がやってる間の暇つぶしになるような、そんな感じのをね」

ん？頷くだけって…ああ、曲を選んだのか。なら仕方ないか。

というか、だいぶハマったんだね。

ちなみにそのあと、僕が「そろそろお昼にしようか」と言うまで休憩もなしにビー○セ○バーを楽しんでいた。

よくもまあ、腕が疲れないもんだ。例えコントローラーが軽いんだとしても。

……お昼にしよう、と言って冷蔵庫にあんまり食材がないのを忘れていた。ついでにインスタントもほとんどない。

しようがないので、2人で近場のスーパーで適当に買い、作る事になった。

悠希が一番面倒なソースを作り、僕は麺を茹でつつ簡単なサラダを作った。

まあ、半分で売られてるキャベツを千切りに、キュウリを乱切りとかそんな感じ。

ミートソース（手抜き）なら、普通に合うよね！みたいな雑に決めてたりするのも手抜きがゆえ。仕方ないね。

「ふう、普通に美味しかったな。やっぱりよく食べるやつの方が失敗しないもんな」

「そうだね、よく見るメーカーのを選んでたからね。プロテインだね」

「いや、プロテイン関係なくね?!」

（って俺がノリツッコミしてどうする！）

ふふん。いつもボケる側の人間にツツコミをさせると楽しいね。  
してやったり、という顔を悠希に向ける。…半目で返してきた。  
たーのしー!

……………なにしてんだ、僕は。

「…それは別として。とりあえずまた今度も健康診断するんだろ?そんな時に聞いとけばいいんじゃないか?」

「あ、すっかり失念してた。そういえばそういう手で確認できたんだったね。ま、なんとかなるでしょ」

大丈夫、と樂觀視していた僕はそのあとは普通に知り合い呼んだりして遊んだ。

そんな普段通り暮らし、その翌月。僕はある意味重大事実を知ることになった。



if9話 一度あることは二度ある

健康診断で不老不死でなくなったと聞いてからかなりたった頃。僕は実年齢115歳になりましたありがとうございます。体的には95歳らしいけど、いまいち分らないねえ。

というか年甲斐もなくふざけたりしたから子供や孫達に呆れられたりもした。酷いよね？

両親が亡くなったり、友人らに先立たれたり辛いことあったんだからさ、気分をあげようとするのは無理もないじゃん？ねえ。

「まあ、夫も生きてるだけマシかな？」

「あつ、お母さん。自室でなにしてるの？」

「えっ？かつての相棒を愛でてるだけよ？」

(…どう見ても遊○王のデツキケース…。いや、お母さんは前からこうだったから今更気にしても負けな気がする)

今はもうほとんど遊ばないのだからしょうがない、としてもらうとして。

なにせ相手もだいぶなものだし、仕方ないものだからねえ。逆に僕は最初の頃こそ…いや、今もか。加齢に喜ぶバカだからね、どうしようもないね。

「えーと、それはいいとして。お母さん、そろそろ孫が来るんだって。楽しみだね」

「あらあ、そうなの。確かに楽しみね。なんならその時のご飯、はりきつちやおうかしら」

「無理はしないでね？…って言っても体内年齢がほぼ20代のお母さんなら平気か」

「ええ、任せてちょうだい！」

(…だ、だいぶはりきってるなあ。というか本当に元不老不死だったの？原因不明でなって、それが治るとか夢物語みたいだけど。いや、

色々他の人との相違があるからありえる……の、かな？なにかおかしいような気がするけど)

呆れたような眼差しで見られてるような気がするけど、気にしない。

なにせ呆れられる自覚もあるし。

そのあと、いつもの通りに料理してみたり、来るであろう孫となにをするか悩んだりしていた。

ただ、病魔はそれを許してはくれなかったみたいだけどね。仕方ないね。

あれからしばらくたった。というか数ヶ月とかその辺りじゃない？

入院生活って暇すぎない？

「橘さん、退屈なのは分かりますがわざと『徘徊してるのよ』って言うのはやめてください。まぎわらしいですし、貴方は徘徊でなく散歩って言うんですよ?。」

「その方が楽しいからよ。ほら、私っておばあちゃんになったわけじゃないよ。」

あれ？なんでこの子、呆れてるのかな。というか半目で見てきてる？

うーん、今のはさすがに分からないぞ。

「……な、なにかと違うような気がします。ところで今のところお加減はいかがですか？」

「えっ？元気も元気。治ってきてるんじゃないやなくて完治しましたって言われても今なら信じるほどよ？」

「それはよかったですね。ただ…ですね？徘徊でないのに徘徊とおっしゃるのはやめてください。困惑する看護師のがたくさんで私にしよつちゆう聞きに来るんですよ？」

あ、そうか。水瀬紫苑になにかと僕のことを教えて貰ってた人だからその分他の人から聞かれるのか。仕方ないね、頑張れ。

たぶん、天神陸から教えて貰ってた人もそうだろうね。こっちも他人事だからこそ頑張れ。

なんて思っていたのは、今日までだった。なにせ夜におぼろげで、もうほとんど覚えてないけど色々あったらしいから。

ううん、なんか凄いことになったなあ。いや、他人事ひとじゃないんだけどね。

夫、子供3人、孫2人、友人1人が看取りに来た。

友人は夫が呼んだのかな。そう思うことにしよう。

「ねえ、悠希……最期に煙草、いいかしら？」

「ああ……」

と言ってタバコの箱を取り出す彼。医師1人、看護師1人もいるけど止めに来ない。まあ、別にこれぐらいはね？

贅沢させてほしいもの。

「まったく、悠希。お前だって急ぎでもライター持ってきたんだろう？まあ、俺的には葵さんに色々してもらった礼もあるからするけど」「素直じゃないね、湊さんって方は」  
そう言われた彼は少し気まずそうに、スネたように頬をふくらませた。

微笑ましくて笑ったら皆も笑った。

ああ、これはこれでよかった。

一服をもらい、少し吸ったところで灰皿で消した。贅沢だけど、もういいかな。

それで、なにか言われたり、見られてる中眠りについた僕はもう二度と目覚めることはなかった——

——バサリ

うおっ!?!なんだ!?!なんか久しぶりに跳ね起きた気分だよ!?!しかもなんか懐かしい感覚!?!こう、暗闇から這い上がったとかそんな良くわからないやつ!

…ってアレ?横を見たら、普通に皆いるし…:うん、ひとまず無かったことにしよう!?!さあ、やり直しとして布団に入り直そう。たぶん自分の死体が僕の下にあるだろうけど、この際気にしない!

「おーい、葵。なんで布団にまた入ろうとする?というかお婆ちゃん…いや、どっちもお前か。ともかく上にいるせいでもりあがってるんだから分かるんだぞー」

「お、お母さんが死んだと思ったら若い女の人がでてきた…:!?!私もなにを言ってるのか分からないけど、なんか凄いことになってる…!」

「いや落ち着けて姉ちゃん。きっと夢かなんかだからつねれば覚め

る」

「お姉ちゃんどころかお兄ちゃんも…。あたし達に言つてたじゃん。ねえ?」

孫に同意を求めてどうする。

…え、女の子も男の子2人も真面目に聞いてたの?余計に出ずらいじゃん。

というか悠希と末っ子だけ落ち着きすぎじゃない?

「…不老不死ってまたなるものでしたっけ」

「……さあな。俺には全く分からない。というか天神さんも予想はしてなさそうだな…」

って悠希に布団めくられたんだけど!?

「うん、やっぱりお前だな。というか20代近くの葬を見るのは久々だな…懐かしい」

……あー、うん。デスヨネー。

んでもって僕は年寄りだった頃の遺体の上にいると。

どーゆーことなのー!って叫びたいのは僕だけであってほしい。ほんと。

ああ、これからどうなるんだろうな。

心の中で遠い目をするしかないな、と考えた。というかこういう時の反応の答えを急募したい。

そんな僕はとりあえず顔をそむけることにしたのだった。現実逃避ってやつをしたくなつたから。仕方ないね。うん。仕方ない。

## 番外編

### 番外編 不老不死達は（篠崎葵視点）

僕こと篠崎葵と篠崎<sup>あかね</sup>茜は兄妹。

僕は白髪混じりの黒髪を肩より少ししたままでのばしている。日焼けしにくい体質のせいですが赤くなるのがネックだと思っている。大体身長は154cmだったはず。

んで、兄さんは身長170cmジャストの着痩せタイプ。手入れが面倒ってだけの理由でおおよそ半年に1回はその黒髪を切ってる。日焼けしても赤くならないのが羨ましい限り。

まあ、それはさておき僕達がある程度育った頃、お互いが不老不死な上にまさかのどちらも一度しようもない理由で死んだことがきっかけで分かったという、なんだかこの世は理不尽だなと思ってしまった出来事から5年がたった。

僕は17歳から22歳に、兄は18歳から23歳になった。という見た目変わらないから20代でいいんじゃないかと思う今日この頃。

そりゃ僕と兄さんは不老不死だから見た目が変わったらおかしいね。

……うん、当たり前だったわ。

「というわけで僕達は20代と名乗ろうと思います」

「いや、実際に私と君は20代だからな。むしろ10代後半でも通じらんじやないのか?…あとなにが『というわけで』なのやら」

すつとぼけた表情をしてふざけたポーズを試してみる。これが返事だっ!

「おいおい、お前ん中だけで話をまとめられても困るぞ?むしろ葵……いや、妹よ。私がいつもツツコミに回るとは思わないことだな」「な、なんだってー!」

(分かってて言ってるだろ、こいつ。むしろ俺以外でこうふざけるのは友人相手だけだし、しゃーないの……か?)

うん、まあ、呆れたような表情になるのも仕方ないね。一応やる相手は僕も考えてるし、セーフセーフ。

「さて、それはさておき……家の掃除でもするか?」

「あー……そうだね、やらないとね」

2階建ての一軒家。

間取りは1階が玄関より右手に寝室扱いの和室、前にリビング、左手にはトイレ。居間には台所と小さめの庭に行ける少し大きめの窓があるぐらい。

階段をあがればすぐ左に洗面所込みの風呂、少し歩いて部屋、正面に部屋がある。ベランダ、ロフトに行けるから便利っちゃ便利かな。趣味のものが多いいのしよがない。

(ま、主にやるのはベランダとロフト以外なんだけどな。あ、風呂もか)

「ひとまず私が朝飯適当にちやちやつと作つとくからさ、お前は洗濯頼むわ」

「はいはい、分かったよー」

と言いつつ手をヒラヒラと振りながら僕は現在いるリビングの出入口付近にある階段から2階へ。洗濯機は2階だからね、仕方ないね。

全部終わらしたので、僕は兄さんにちよつかいをかけることにした。というか、少しイタズラをした。

しようもないけど、部屋に入ったら死んだフリをしてるだけ。

「ほんと、なにしてんだか」

「死んだフリ」

(そりやどう見ても死んだフリなんだ、うけどな。……やれやれ、葬がリストカットやらなんやらしてた頃が懐かしいね。そのせいで左手に縦やら横やらの傷が残ってるけど、もう仕方ないだろう。ま、それはさておき何回かやってるんだ。血のりを片付けるの大変なことぐらい知ってるだろ)

…いい加減立つか。血のりとか落とすの大変だし、面倒くさいし。

「ならやるな」って言われたけど、たまにやりたくなるから仕方ないね。

あ、ため息つかれた。

「……そうか。とりあえず片付けて、朝飯食べるぞ」

「分かった」

そう言ったあと、頷いた。

ひとまず一番面倒な血のりとかの処理からし始めた。ありがたいことに兄の茜も手伝ってくれたからお礼を伝えたら「へいへい」と軽く流されたけど、優しい。やっぱり兄さんってそのうちモテるんでは？



出てきた朝食は白米、たくあん、たまご、みそ汁とシンプル。これは最後にたまごをかけるって意味かな？

「朝はこんなんでも足りるだろ」

「そうだね。んで、朝から茜は大盛りときた」

「ほら、私はちようど食べ盛りだからな。仕方ないだろ」

食べ盛り……なのかな？

いや、確かによく食べる影響かやたらと身長が高いけどさ……。もう僕も君も高くないんじゃないんじやないの？不老不死になっちゃったし。そこどころどうなんでしょ。

「……そんな半目で見なくても、だな。意外と成長期がまた来たりするかもしれないって不老不死が期待してもいいだろうが」

「はいはい、そうですねー」

（まったく、こういう時は軽いんだよな。というか楽しみの一つぐらいはいいだろ。というか何故に半目？）

とりあえず、ある程度普通に食べ進めた。僕は見て考えてたことをそのまま言った。

「食事の呼吸 壺の型 卵がけご飯！」

「静かに食べれんのか、お前は」

（いくらハマったからって影響を受けすぎだろ、こいつ……）

とりあえずサムズアップしておこう。

「いいんじゃないかな」

「いやあのな……………まあ、いいや」

とまで言うため息をつく兄。

ハマったら影響をすぐに受けると言うのは昨日今日の話じゃないはずだけどね。というか兄さんも一人称「俺」から「私」に変えてるし、なんの影響って聞き返したいほどなんだけど。

「んで？明日遊びに行くんだろ？」

「そうだね、兄さんも一緒に行くんだよ」

さも当たり前のように答えたら兄さんが目を丸くした。あれ？伝えてなかったっけ？

「……………いつの間に「俺」も含めた？」

「えっと、そうだね。遊びに行こう、という話が出たころには名前があがってたね」

(マジか……………。決まってるならしようがない、か。ま、でもふざける奴が多いからツツコミがいるにこしたことはないだろうし、いいか) 呆れたように半目で見てくるけどか、気にしな—い気にしな—い。家に引きこもるよりはいいし、なによりツツコミに困らない！いや、相手によつては僕もツツコミか。

「ま、というわけで兄さんも準備してクレメンス」

「さらっと外国語混ぜんな。…あー、はいはい。分かったよ。行けばいいんだろ？」

「おー、話のわかる兄さんは好きだぞー？」

(…こいつ、現金だな…。むしろ呆れ通り越して感心するよ)

おーおー、半目で見てくるねえ。ふざけたりなんなりするのはもう今さらじゃないよ。

ま、兄さんに恋人が出来たら退屈しなさそうだね。もちろん相手が。

「とりあえず行くんだろ？なら準備するぞ」と呆れたように兄さ

ん。準備が僕より早いんだからそういうのも当たり前か。

ってか兄さんのことチラ見してたけど準備早！僕も急がないと！

いつもより急いで出かける準備をした。

番外編 不死身兄妹達の平穏な日々（篠崎茜視点）

……急いで準備して忘れ物しそうになった自分の妹を見て、急かすんじゃないかったかなと考える俺だった。

はい、どうも。とりあえず誰へともなく自己紹介しようと思う。

俺は篠崎茜<sup>あかね</sup>。ちよいと名前は女性ともとれる中性的なものだけど、気にしないでくれ。

んでもって、兄妹共に原因不明の不老不死と来た。うわー、ゲームみたいだなーとか適当に考えた俺と違い、妹の葵は酷かった。

……と、関係ないからそれ以上は黙っておくとして。俺は火を出せる。

日常生活でも意外と役に立ってな？俺の知り合いに喫煙者がいるんだが、ライターを忘れた時には火をつけてやれたり、家では食材を少し炙りたい時に使える。便利だぞ、この能力。

だからっていつも使えるわけじゃない。今日みたいに葵達と遊びに出かけるといらないくなる。そもそも用途が限られてるからしょうがないとしか言えないけどな。

「やっほー、悠希と一ノ瀬さーん！」

「そこはまだおはよう」だろうに……」

というかそんなに元気よく右手をふってて葵は疲れなのか？と俺は思ってしまう。

んで、今葵が呼んだ一人目の名前は「橘悠希」という男友達だ。

そうだな…だいぶ落ち着いた感じの服ばかり着ている奴で、短い黒髪とかよくいる感じの人間だな。肌がやや日焼けてるが、それはそいつの友人とか俺が原因だな。だが、反省も後悔もしてない。

2人目は「一ノ瀬湊」という奴だな。こいつも男友達つてとこだ。基本的にこっちは悠希ほど髪を短くしない。あっちが坊主頭から

のベリーショートって言えば湊はショートヘアでいることが多めだ。  
……とは言ったが、女性のショートヘアよりは短いぞ。うん。

こっちは服装はカジュアルなことが多いが、本人曰く「オタクとしてオシャレに！」がモットーなのでもう好きにすればいいんじゃないかな。

「よっす、2人共おはよ」

「篠崎さん、茜、おはよう」

「おっはー」

「おう、おはよう……葵、それキラッてやる時のポーズだろ。挨拶違  
いだ」

うん、何故俺にそのドヤ顔を向ける？

「むしろ半年も友人として遊んでんのに見たことのあるポーズが今の  
マク○スとかル○ーシユとか一部だけだからいいんじゃないか？」

「そ、それはどうかと思うぞ？……って茜も茜で頭抱えるよりもその  
子の人見知りをどうにかしなきゃだろ」

そう言われてもな。

(むう……これでも兄さんから「お前にも友達が2人できた。だから大  
丈夫そうだな」って言われたのにな)

「大丈夫だろ。というか君達も仲良くなれば私とみたいに話せるさ。  
葵でもな」

「もう猫でいいんじゃないかな……」

悠希だけじゃなく湊すら呆れたような表情を浮かべている。葵の  
人見知りが酷いのは教えただろ。

これでも良い方なんだ、諦めてくれ。

「つと。そんなことより遊園地行くんだろ？行くぞ」

「あれ、教えてもらってるのかい？」

「教えてもらってないが、葵のことだ。湊や悠希らを連れていくなら

ゲーセンかその辺りかと思ってな。……むしろ私が頑張らないとだ  
が」

「そーいやそうだったな。頑張れ」

めっちゃ他人事だな、こいつ。

「まあ、今日は平日なんだ。多分空いてるんじゃないかな。ね？篠崎  
さん」

「た、たぶん？……というか湊さんなら僕のことを名前で呼んでいいつ  
て言っただけだ」

そう言われて気まずそうにするのはいいが、「いいから」と「やつ  
ぱり苗字の方が」みたいなほぼエンドレスなやり取りはさせんぞ。

「とにかく、もう移動するぞ。電車が混む」

「だな。それにバスも混む時は混むはずだからそれはそれで面倒だ」

「あー…それもそうだね。んじゃ、行こうか」

うん、とだけ言っただけ。俺や悠希も納得したところで移動し始  
めた。

というか集合場所で数分は話してたのか？凄いなあ。

電車とかバスは思ったよりも混んでいなかった。むしろその方が

全員座れて助かるが。バスはなるべく近くに座って移動し、電車は端から葵、俺、悠希、湊の順で座って移動していた。

移動して大体一時間弱ほどたった時に目的地の遊園地 “フアンタズムパーク” についてた。

それにしても時期的なものもあるのか、朝だというのにそこそこ人がいるな。まだ春休みに入ってた方が多いから……うん、マシか。

「兄さん、これであまりいい方とか凄いいね……」

「むしろ花粉症の人がいないことの方が助かるのだが」

そう言ったら湊から「いや、もう俺達の中で “花粉症の人がいない” と言えなくなるんだよ」と言われたあとに

「どうしてかって？……俺、スギ花粉になつたくさいからだ」

「うわあ、この時期に大変だな。よし、湊。今度ゲーセンでガンダムやりに行こうぜ！」

「話聞いてなかった!？」

「うん、さすがの僕も頑張れとしか……」

「…………ハハッ」

(驚いたり、遠い目をしたりと表情が忙しないなあ……。これからゲーセンで遊ぶ時とか大変そうだね、湊さん)

「まあ、楽しい話はさておき私が4人分買ってくるからそろそろいいか?」

「俺的には楽しい話じゃないぞ?!」

「ハハハ、いいじゃないか。——ああ、葵ちゃんなら俺らと一緒になら大丈夫だろ?」

いや、お前達相手に心配もないだろ……と内心思った。どうせはぐれたりしないし、まだ気心知れた友人だから一緒にいて落ち着くだろうって話だろう。

(確かに僕もこの2人とは仲良くなってきたけどさ……。あ、でも一緒にいた方が分かりやすいみたいだし、いいか)

……お?なんで呆れたような顔を葵はしてるんだろうか?ふむ、よく分からないぞ……。とりあえずさっさと買ってくるか。

いい加減チケット売り場に人が並んできたし。並ぶ前に買いたいたいもんだ。

5分後、俺は大人4人分のチケットトロー4人分で2万円したトローを持って葵達の元へ。

おお、話してるのにこつち向いた。いや、誰かが先に気づけば当たり前か？

(俺より数センチ高いだけでも普通に目立つとか探しやすくて楽だな)

「おーい、買ってきたから渡すぞー？」

「あんがと」

「ありがとな」

「ん……ありがと」

上から悠希、湊、葵の順番に返事をしてきた。まあ、中学生の頃からの友人2人なら流れで大人1人分のを渡してくれるんだな。

葵は……あとで渡してくるだろ。妹ならありうる。というかこの4人で遊園地とか初めてすぎて分からん。

そこそこの人が並んできているチケット売り場を横目に俺達は園内



へ向かっていった。……といってもチケットにあるQRコードを読み込ませて入るだけなんだけどな？

しかもちゃんとしたのじゃないと通れないところを聞くと凄くしか思えない。

(だいぶ前に来たつきりだったけど、平日とはいえさすが五周年なだけあるなあ)

「ふうん、五周年記念なんてしてたのか」

「みたいだね。というか悠希は来たことないっけ？」

「ないが?……ってお前らは来たことあるのか」

「うん、1人だったり、友達とだったり……だね」

「まあ……うん、あるよ。前は家族で、今は兄さんとたまに来てた」

俺も葬につられて頷く。

「んだな。私や葬の都合のいい時に気分転換として……ね。ただたまに人が多くて困ったことがあるが」

ハハハ……と苦笑された。なんだ、俺だって多少苦手なものはあるもんだよ？

(あ、そうだ。最初はちよつと「楽しい」アトラクションに皆で行こうかな。たぶん兄さんなら気づけるだろうけど)

「……ん」

「お、どうした?服なんか引っぱって……ってまさか最初から行くのか?確かに良いかもしれんが……」

(茜の歯切れが悪い時は大体この兄妹にとって楽しいことだって俺は知ってるからな?)

あ、ちよつ。話もしないうちに葬は行くんじゃない。悠希もノリノリでついてくとか分かってるのか?これからコーヒーカップに行くことを。

「え?ちよ、どこ行くねーん」

今の湊の言葉はある程度時間が経って平日なのに増えてきた人々

によってかき消された。――というか俺達が聞き流した。

番外編 不死身兄妹達の平穏な日々2 (篠崎茜視点)

コーヒーカップに乗った俺達は……いや、俺は疲れた。なにせ悠希と葵がやたらと回してくるもんだからやばかった。何回俺たちのとこだけブレーキをかけられたことか。

ちなみにその2人は飲み物を買って行って、この場にはいない。元気だな、あいつら。

「……あー、湊。大丈夫か？無理そうなら次のアトラクション、休んでもいいぞ」

「ハハ…油断してたわ。物によっては考えとくわ。茜こそ平気かい？」

適当に手を振る。久しぶりのせいもあってだいぶ来た。

むしろこの時にしかやれないからこそ俺も羽目を外しすぎたのか。実は俺も勢いかけるのに手を出したのがまずかったのか。もはや分かんねえ…。

(ううん、遠い目をしてる辺り大丈夫じゃないな。茜も羽目を外すときあるとかめっちゃ珍しいわ。……うん、久しぶりらしいから仕方ないかな?)

「…まあ、なんだ。次のは落ち着いたのに乗ろうか」

コーヒーカップに比べて、というのは黙っておくか。反応が見たいし。

それに面白そうだ。…っと、2人が戻ってきたな。横目で、だがその2人の組み合わせが意外と身長差あるし、分かりやすいんだよな。

チラ見してる感じからして葵が爽健美茶2本、悠希がジュース2本持ってるな。

「…うん、だね。っと、篠崎さんと悠希おかえり」

「ん、今戻った」

「よう、カルピスカ爽健美茶。どっちがいいよ」

微笑みを浮かべながらの葵に悠希は：おう、元気そうだな。  
というかジュースカ。今もコーラはあるのかもしれないが、今は飲  
みたい気分ではないな。

「兄さんは強制爽健美茶ってことで」

「うえーい」

「なら俺はカルピスで。さっぱりした味が飲みたくなった」

「んじゃ、俺もカルピスー。葵は茜と同じでも構わないよな？」

（この人なら領いても分かるから領いておこつと。コミュニケーションが楽でいいな）

4人かけの席に葵と悠希も座つたところでひとまずそれぞれの前  
に置いてもらった飲み物を一口飲むことにした。

値段は：うむ、あとで葵から聞けばいいか。

というか人が増えてきたな。時間がたってきたからか？

「ひとまず次はなにに乗る？私的にはジェットコースターがいいんだ  
けど」

「待った待った。それって落ち着いてくないか？わりと激しいと思  
うんだけど」

半目で呆れたように見てくる湊が左横に座っているのをいいこと  
に肩に手を乗せてニヤリと笑う。

なにを今更。俺が「落ち着いた」とか言って実際にそうだったの  
は数少ないだろう？ー特に俺が笑みを浮かべたときは相手に  
とって落ち着いた感じのところを教えなかったはずだが。

（うわあ……ふざける時はとことん、ってだけあるわ）

「あ、じゃあ昼食前にさっさと行こうぜー」

「んだねー。昼食後でもよさそうだけど、混んでなさそうな今の方が  
いいだろうし」

「さんせー」

「なら12時ぐらいに間に合うよう早く行く？」

最後に葵がそういった事でなるべく早く飲み物を飲み、向かうことに。

その時はまだ混んでなかったので、すぐに乗れたな。でもさ……一番前が俺と葵って、聞いてないぞ。

すぐ後ろには悠希と湊。かわれよ、みたいな視線を送ったが無理だった。

とはいえ、普通に楽しかったんだが。

小落下1回、大落下1回だったジェットコースターから降りた俺達は次に乗るアトラクションを探しつつ、少し広めの園内を歩き始めていた。

いや、十分広いか。ジェットコースター、回るコーヒーカップにライド系とかいくつもあるもんな。

「楽しかったから次は『上げて落とす』のお化け屋敷でいい？」

「テンションを上げて落とすとかえげつねえ……」

「とかお化け屋敷ってここは2ヶ所あったんじゃないかい？子供も泣かないような短いのと本格的な方。もし行くなら本格的な方に私は行きたいんだが」

……何故悠希は一瞬俺を睨んだ？

いや、知らないわけじゃないんだが、湊がいるだろ？この4人組の中でホラーが苦手なの、知ってるだろ？

人が怖がってたらしい、と言ったのはどの口なんだか。

……かくいう俺は不老不死になってからというもの、お化け屋敷

なんて「程度」のものは怖くなんてないんだよな。もつと怖いものは別にあるし。

よし、いつもの通り無視で。お前達と楽しめるうちに楽しみたいってのもあるから強引な手も使うぜ？

「うん、全員の意見がまとまったから食べ歩きしながら行こうか」「ちよっ、おま」と言いかけた悠希を尻目に湊も「お、興味ある〜」とか言い出した。これで3対1だな？悠希よ。

そう思いながら少しばかりドヤ顔を向けたから、今度なにか対戦系でやられるな。うん。間違いない。

ま、それも楽しいからいいんだけどな。そう考えられる相手だからこそ、ってところだが。

出たあとは悠希に少し睨まれたり、湊の反応が面白かったりと入ってみてよかったと思ってしまう。

もちろん、あまり入りたくないと思っただけで、悠希も葵も楽しめたってことで流された。ま、頑張れ！

んで、その後も色々回って、買って楽しみまくった。土産も買った。

今後遊べるかは分からんけど、今を楽しむしかないな。まだ考えんところ。先延ばしだとしても、俺達とこいつらとの時間は別だからな。

だって、両親や悠希や湊と俺達兄妹の関係は――